

Sun Blade X3-2B (旧 Sun Blade X6270 M3)
設置ガイド



Part No: E36228-01
2012年7月

このソフトウェアおよび関連ドキュメントの使用と開示は、ライセンス契約の制約条件に従うものとし、知的財産に関する法律により保護されています。ライセンス契約で明示的に許諾されている場合もしくは法律によって認められている場合を除き、形式、手段に関係なく、いかなる部分も使用、複写、複製、翻訳、放送、修正、ライセンス供与、送信、配布、発表、実行、公開または表示することはできません。このソフトウェアのリバース・エンジニアリング、逆アセンブル、逆コンパイルは互換性のために法律によって規定されている場合を除き、禁止されています。

ここに記載された情報は予告なしに変更される場合があります。また、誤りが無いことの保証はいたしかねます。誤りを見つけた場合は、オラクル社までご連絡ください。

このソフトウェアまたは関連ドキュメントを、米国政府機関もしくは米国政府機関に代わってこのソフトウェアまたは関連ドキュメントをライセンスされた者に提供する場合は、次の通知が適用されます。

U.S. GOVERNMENT END USERS:

Oracle programs, including any operating system, integrated software, any programs installed on the hardware, and/or documentation, delivered to U.S. Government end users are “commercial computer software” pursuant to the applicable Federal Acquisition Regulation and agency-specific supplemental regulations. As such, use, duplication, disclosure, modification, and adaptation of the programs, including any operating system, integrated software, any programs installed on the hardware, and/or documentation, shall be subject to license terms and license restrictions applicable to the programs. No other rights are granted to the U.S. Government.

このソフトウェアもしくはハードウェアは様々な情報管理アプリケーションでの一般的な使用のために開発されたものです。このソフトウェアもしくはハードウェアは、危険が伴うアプリケーション（人的傷害を発生させる可能性があるアプリケーションを含む）への用途を目的として開発されていません。このソフトウェアもしくはハードウェアを危険が伴うアプリケーションで使用する際、安全に使用するために、適切な安全装置、バックアップ、冗長性（redundancy）、その他の対策を講じることは使用者の責任となります。このソフトウェアもしくはハードウェアを危険が伴うアプリケーションで使用したこと起因して損害が発生しても、オラクル社およびその関連会社は一切の責任を負いかねます。

OracleおよびJavaはOracle Corporationおよびその関連企業の登録商標です。その他の名称は、それぞれの所有者の商標または登録商標です。

Intel, Intel Xeonは、Intel Corporationの商標または登録商標です。すべてのSPARCの商標はライセンスをもとに使用し、SPARC International, Inc.の商標または登録商標です。AMD, Opteron, AMDロゴ、AMD Opteronロゴは、Advanced Micro Devices, Inc.の商標または登録商標です。UNIXは、The Open Groupの登録商標です。

このソフトウェアまたはハードウェア、そしてドキュメントは、第三者のコンテンツ、製品、サービスへのアクセス、あるいはそれらに関する情報を提供することがあります。オラクル社およびその関連会社は、第三者のコンテンツ、製品、サービスに関して一切の責任を負わず、いかなる保証もいたしません。オラクル社およびその関連会社は、第三者のコンテンツ、製品、サービスへのアクセスまたは使用によって損失、費用、あるいは損害が発生しても一切の責任を負いかねます。

目次

このドキュメントの使用方法	5
Sun Blade X3-2B モデル名の変更	5
最新のファームウェアおよびソフトウェアの取得	5
ドキュメントとフィードバック	6
このドキュメントについて	6
サポートおよびトレーニング	6
寄稿者	7
変更履歴	7
設置手順について	9
サーバーの機能とコンポーネント	11
サーバーの機能	11
サーバーモジュールのフロントパネルとインジケータ	14
背面パネルの機能	15
UEFI BIOS	15
仕様	16
サーバーモジュールの取り付け	19
サーバーモジュールの取り付け準備	19
サーバーモジュールを取り付ける	23
サーバーモジュールの配線	25
3 ケーブルドングルをサーバーモジュールに接続する	26
VGA モニターをドングルビデオコネクタに接続する	27
キーボードおよびマウスをドングルまたはサーバーモジュールに接続する	28
シリアルデバイスをドングルに接続する	29
CMM NET MGT ポートにケーブルを接続する	29
Oracle ILOM への接続	31
Oracle ILOM の概要	31
Oracle ILOM SP IP アドレスの特定	37
サーバーモジュール SP Oracle ILOM へのログイン	43

Oracle ILOM 経由のサーバーモジュールコンソールへのアクセス	47
ソフトウェアとファームウェアの設定	53
Oracle System Assistant へのアクセス	53
ソフトウェアとファームウェアを設定する (Oracle System Assistant)	57
オペレーティングシステムおよびドライバのセットアップ	58
オペレーティングシステムをインストールするストレージデバイスの準備	61
サポートされているホストバスアダプタ	61
ストレージドライブを準備する (Oracle System Assistant)	65
仮想ドライブをブート可能にする (LSI WebBIOS ユーティリティ)	67
インストール済み Oracle Solaris OS の構成	71
Oracle Solaris OS のドキュメント	71
構成ワークシート	72
インストール済み Oracle Solaris 11 を構成する	74
インストール済み Oracle VM ソフトウェアの構成	79
Oracle VM Server 構成ワークシート	79
インストール済み Oracle VM Server を構成する	80
Oracle VM ソフトウェアのアップグレード	83
Oracle VM 入門	84
インストールに関する問題のトラブルシューティング	87
サーバーの電源切断による正常な停止	87
電源の切断による即時停止	89
サーバーのリセット	91
サーバーの障害の特定	92
サーバーの電源状態のトラブルシューティング	93
技術サポート情報ワークシート	94
システムのシリアル番号の確認	94
サーバーファームウェアとソフトウェアの入手	97
ファームウェアとソフトウェアのアップデート	97
ファームウェアおよびソフトウェア入手のオプション	98
入手可能なソフトウェアリリースパッケージ	98
ファームウェアとソフトウェアの入手	100
アップデートのインストール	104
索引	107

このドキュメントの使用方法

このセクションでは、システムの最新のファームウェアとソフトウェア、ドキュメントとフィードバック、およびドキュメント変更履歴の入手方法を説明します。

- 5 ページの「Sun Blade X3-2B モデル名の変更」
- 5 ページの「最新のファームウェアおよびソフトウェアの取得」
- 6 ページの「ドキュメントとフィードバック」
- 6 ページの「このドキュメントについて」
- 6 ページの「サポートおよびトレーニング」
- 7 ページの「寄稿者」
- 7 ページの「変更履歴」

Sun Blade X3-2B モデル名の変更

Sun Blade X3-2B の旧称は Sun Blade X3-2B です。この名前がまだソフトウェアに表示されている場合があります。名前の変更は、システム機能の変更を示すものではありません。

新名称の意味は次のとおりです:

- X は、x86 製品であることを意味します。
- 最初の数字 3 は、サーバーの世代を意味します。
- 2 番目の数字 2 は、プロセッサの数を意味します。
- アルファベット B は、ブレードサーバー製品であることを意味します。

最新のファームウェアおよびソフトウェアの取得

Oracle x86 サーバー、サーバーモジュール(ブレード)、およびブレードシャーシのファームウェア、ドライバ、およびその他のハードウェア関連ソフトウェアは、定期的に更新されています。

最新バージョンは次の 3 つのうちいずれかの方法で入手できます:

- Oracle System Assistant - これは、Sun Oracle x86 サーバー用の、出荷時にインストール済みの新しいオプションです。OSA は必要なすべてのツールとドライバを備えており、ほとんどのサーバーに取り付けられている USB ドライブに格納されています。

- My Oracle Support – <http://support.oracle.com>
- 物理メディアのリクエスト

詳細については、97 ページの「サーバーファームウェアとソフトウェアの入手」を参照してください。

ドキュメントとフィードバック

ドキュメント	リンク
すべての Oracle 製品	http://www.oracle.com/documentation
Sun Blade X3-2B	http://www.oracle.com/pls/topic/lookup?ctx=SunBladeX3-2B
Oracle Integrated Lights Out Manager (ILOM) 3.1	http://www.oracle.com/pls/topic/lookup?ctx=ilom31
Oracle Hardware Management Pack	http://www.oracle.com/pls/topic/lookup?ctx=ohmp

このドキュメントについてのフィードバックは次からお寄せください:<http://www.oracle.com/goto/docfeedback>。

このドキュメントについて

このドキュメントセットは、PDF および HTML の両形式で入手できます。情報はトピックに基づく形式 (オンラインヘルプと同様) で表示されるため、章、付録、およびセクション番号は含まれません。

特定のトピック (ハードウェア設置やプロダクトノートなど) に関するすべての情報が含まれる PDF を生成するには、HTML ページの左上にある PDF ボタンをクリックします。

サポートおよびトレーニング

次の Web サイトに追加のリソースがあります:

- サポート:<http://support.oracle.com>
- トレーニング:<http://education.oracle.com>

寄稿者

主著者: Lisa Kuder、Ray Angelo、Mark McGothigan、Cynthia Chin-Lee。

寄稿者: Yi Cai、Kenny Tung、Salomon Chavez Velazquez、Daniel Silverman、Johnny Hui、Angela Vlahos、Anand Srinivasan、Darren Tran、Mark Stanton、Denise Silverman、Ralph Woodley、Mick Tabor

変更履歴

次の一覧はこのドキュメントセットのリリース履歴です:

- 2012年4月。初版。
- 2012年5月。SW 1.0.1に合わせて更新。改訂版ドキュメントライブラリを再リリース。
- 2012年6月。SW 1.1に合わせて更新。プロダクトノートとサービスマニュアルを改訂。
- 2012年7月。サーバーモデル名の変更。全ドキュメントを改訂。

設置手順について

注 - 重要: Sun Blade X3-2B は以前は Sun Blade X6270 M3 サーバーモジュールという名前でした。この名前がまだソフトウェアに表示されている場合があります。名前の変更は、システム機能の変更を示すものではありません。

次の表に、Sun Blade X3-2B の設置を行うために必要なタスクを示します。

手順	説明	リンク
1	サーバーモジュールの機能を確認します。	11 ページの「サーバーの機能とコンポーネント」
2	サーバーをモジュラーシステムシャーシに取り付けます。	19 ページの「サーバーモジュールの取り付け」
4	サーバーモジュールのケーブルを接続します。	25 ページの「サーバーモジュールの配線」
5	Oracle ILOM を設定します。	31 ページの「Oracle ILOM への接続」
6	システムのソフトウェアとファームウェアを設定します。	53 ページの「ソフトウェアとファームウェアの設定」
7	OS をインストールするためのストレージドライブを準備します。	61 ページの「オペレーティングシステムをインストールするストレージデバイスの準備」
8	インストール済みの OS を構成します。	71 ページの「インストール済み Oracle Solaris OS の構成」 79 ページの「インストール済み Oracle VM ソフトウェアの構成」
9	インストールに関する問題のトラブルシューティングを行います。	87 ページの「インストールに関する問題のトラブルシューティング」

サーバーの機能とコンポーネント

このセクションでは、Oracle Sun Blade X3-2B の機能と製品仕様の概要について説明します。

タスク	リンク
サーバーの機能を確認します。	11 ページの「サーバーの機能」
フロントパネルの各コンポーネントの位置を確認します。	14 ページの「サーバーモジュールのフロントパネルとインジケータ」
背面パネルの各コンポーネントの位置を確認します。	15 ページの「背面パネルの機能」
UEFI BIOS について説明します。	15 ページの「UEFI BIOS」
製品仕様を確認します。	16 ページの「仕様」

サーバーの機能

機能	説明
シャーシの互換性	<p>Sun Blade 6000 モジュラーシステムと PCIe 2.0 ミッドプレーン (モデル A90-B と A90-D では標準)。</p> <p>各シャーシに対応する Oracle ILOM CMM ファームウェアの最小バージョン:</p> <ul style="list-style-type: none">■ A90-B: CMM ILOM 3.0.12.11b (ソフトウェアリリース 3.3.3)■ A90-D: CMM ILOM 3.1 (ソフトウェアリリース 4.2)

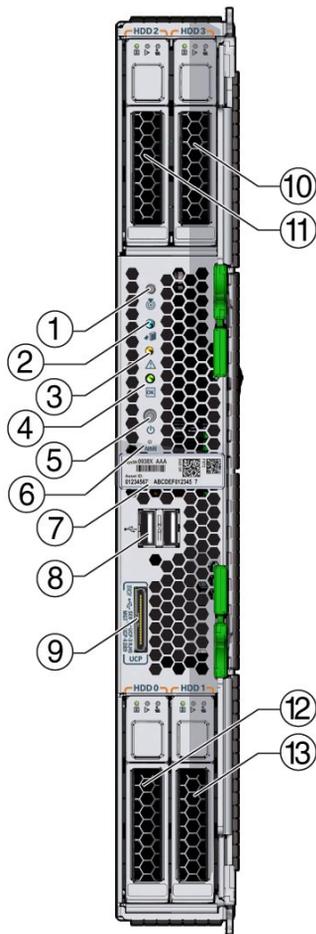
機能	説明
シャーシミッドプレーンおよび内蔵 I/O	<ul style="list-style-type: none"> ■ シャーシの PCIe EM スロットに対する、2 個の (x8) PCIe 2.0 バス接続 ■ REM スロットに対する、1 個の (x8) PCIe 2.0 バス接続 ■ FEM スロットに対する、2 個の (x8) PCI バス接続。PCIe ポートの速度は FEM ごとに異なります ■ FEM に搭載された NEM 用の 10/100/1000 BASE-T Ethernet ポート 2 つ
CPU	<p>Sun Blade X3-2B は 2 つの CPU を搭載できます。サポートされている CPU の詳細は、『Sun Blade X3-2B (旧 Sun Blade X6270 M3) プロダクトノート』を参照してください。</p>
背面パネル I/O	<p>背面パネルからアクセス可能なデュアル内蔵 USB ドライブポート。大半のサーバーモジュールでは、ポート 0 の USB ドライブに Oracle System Assistant がインストールされています。Oracle System Assistant を使用したサーバーの設定については、53 ページの「ソフトウェアとファームウェアの設定」を参照してください。</p>
フロントパネル I/O	<p>1 つの Universal Connector Ports (UCP) をマルチポート (ドングル) ケーブルで使用できます。マルチポートケーブルは、次のインタフェース接続を提供します:</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ VGA グラフィックポート (2D 組み込みグラフィックコントローラ、最大解像度は 1,280 x 1,024 x 16 ビット @60Hz、ILOM RKVMS 経由でリモートで表示した場合は 1,024 x 768) ■ RJ-45 シリアル管理ポート ■ デュアル USB ポート (キーボード、マウス、USB ドライブ) <p>フロントパネルには、USB 2.0 ポートが、前面に 2 つ、内部に 2 つあります。</p>
メモリー	<p>全部で 24 個 (CPU ごとに 12 スロット) の ECC メモリスロット付きレジスタード DDR3 DIMM。サポートされているメモリーの詳細は、『Sun Blade X3-2B (旧 Sun Blade X6270 M3) プロダクトノート』を参照してください。</p>
Network Express Module (NEM) 互換	<p>10 GbE と 1 GbE の両方の NEM インタフェースがサポートされています。</p> <p>サポートされている NEM の詳細は、『Sun Blade X3-2B (旧 Sun Blade X6270 M3) プロダクトノート』を参照してください。</p>

機能	説明
オペレーティングシステム	オプションで、Oracle Solaris をサーバーモジュールにプリインストールできます。Oracle Solaris、Linux、Windowsなどのオペレーティングシステムがサポートされています。使用しているサーバーでサポートされているOSのバージョンの全リストは、『 Sun Blade X3-2B (旧 Sun Blade X6270 M3) プロダクトノート 』を参照してください。
仮想化ソフトウェア	Oracle VM ソフトウェアがサポートされており、サーバーにオプションでプリインストールできます。サーバーモジュールでは、VMware ESXi もサポートされています。サポートされている個々のバージョンの詳細は、『 Sun Blade X3-2B (旧 Sun Blade X6270 M3) プロダクトノート 』を参照してください。
サービスプロセッサ (SP)	サーバーモジュールには、AST2300 サービスプロセッサ (SP) が搭載されています。SP は、IPMI 2.0 準拠のリモート管理機能を提供します。SP の機能は次のとおりです： <ul style="list-style-type: none"> ■ Oracle Integrated Lights Out Manager (ILOM バージョン 3.1) ■ シリアル接続を使用したローカル Oracle ILOM コマンド行アクセス ■ ミッドプレーンへの 10/100 管理 Ethernet ポート ■ IP 経由のリモートのキーボード、ビデオ、マウス、およびストレージ (KVMS)
ストレージ	<ul style="list-style-type: none"> ■ SAS-2 2.5 インチディスクベイ x 4。 サポートされているハードドライブの詳細は、『Sun Blade X3-2B (旧 Sun Blade X6270 M3) プロダクトノート』を参照してください。 ■ 内蔵 USB 2.0 ポート x 2。 ■ フロントパネル USB 2.0 ポート x 2。 ■ 次の 2 つのオプションの LSI REM ホストバスアダプタがサポートされています： <ul style="list-style-type: none"> ■ Sun Storage 6Gb/s SAS REM HBA (SGX-SAS6-REM-Z) ■ Sun Storage RAID 6Gb/s SAS RAID REM HBA (SGX-SAS6-R-REM-Z) <p>詳細は、61 ページの「オペレーティングシステムをインストールするストレージデバイスの準備」を参照してください。</p>
ビデオ	8MB のビデオメモリーで最大 1280x1024 の解像度がサポートされません。

関連情報

- 9 ページの「[設置手順について](#)」
- 16 ページの「[仕様](#)」
- 14 ページの「[サーバーモジュールのフロントパネルとインジケータ](#)」

サーバーモジュールのフロントパネルとインジケータ



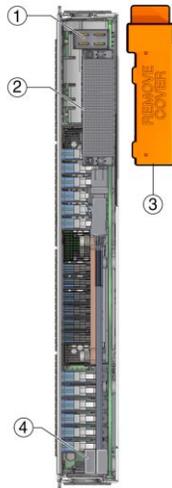
1	位置特定LED(白)。ボタンを押してサーバーを識別します。
2	取り外し可能LED(青)。主電源が切断されています。
3	保守要求LED(オレンジ色)。障害状態が発生しました。
4	OK/電源LED(緑)。モード: <ul style="list-style-type: none"> ■ SP ブート - 高速点滅 (0.125 秒オン、0.125 秒オフ)。 ■ スタンバイ電源 - 点滅 (0.1 秒オン、2.9 秒オフ)。 ■ ホストブート - ゆっくり点滅 (0.5 秒オン、0.5 秒オフ)。 ■ 全電力 - 常時点灯。
5	電源ボタン。短く押すと、サーバーのスタンバイ電源と全電力が切り替わります。 注意-サーバーモジュールが全電力モードのときに電源ボタンを4秒以上押し続けると、即時停止が開始され、スタンバイ電源モードになります。データ損失が発生する可能性があります。
6	NMI ボタン (Oracle 保守専用)。
7	シリアル番号ラベル。
8	USB 2.0 ポート x2。
9	ユニバーサルコネクタポート (UCP)。マルチポート (ドングル) ケーブルに使用します。
10, 11, 12, 13	ハードドライブ (HDD) または半導体ディスク (SSD)。

関連情報

- 9 ページの「設置手順について」
- 11 ページの「サーバーの機能」
- 16 ページの「仕様」

背面パネルの機能

次の図に、Sun Blade X3-2B の背面パネルの機能を示します。



図の説明

1	電源コネクタ	2	I/O コネクタ
3	背面カバー (取り外し)	4	USB フラッシュドライブ 2、3

UEFI BIOS

Sun Blade X3-2B には、Unified Extensible Firmware Interface (UEFI) 準拠の BIOS が組み込まれており、旧バージョンの BIOS に比べて豊富なブートオプションとアダプタカードの構成機能を備えています。

また、UEFI ドライバが組み込まれていないソフトウェアやアダプタ用にレガシーバージョンの BIOS も用意されています。デフォルトの設定は、レガシーバージョンです。

UEFI BIOS の詳細は、『[Sun Blade X3-2B \(旧 Sun Blade X6270 M3\) 管理ガイド](#)』を参照してください。

仕様

次のトピックでは、サーバーモジュールの寸法、電気、および環境の仕様について説明します。Sun Blade 6000 モジュラーシステムシャーシの仕様は、次にある『Sun Blade 6000 および Sun Blade 6048 モジュラーシステムサイト計画の手引き』に記載されています:<http://www.oracle.com/pls/topic/lookup?ctx=sb6000>

サーバーモジュールの寸法

仕様	値
高さ	12.87 インチ (327 mm)
幅	1.69 インチ (43 mm)
奥行	19.6 インチ (497 mm)
重量	20 ポンド (9kg)

電氣的仕様

仕様	値
電圧 (公称)	シャーシのバックプレーンから 12 V メイン シャーシのバックプレーンから 3.3 V AUX
電力 (最大)	604 W (最大動作電力)

注 - Oracle ILOM を使用してシャーシとサーバーモジュールの電力を監視することもできます。詳細については、次の URL にある Oracle ILOM のドキュメントを参照してください:

<http://www.oracle.com/pls/topic/lookup?ctx=ilom31>

環境仕様

仕様	値
温度 (動作時)	41 - 90° F 5 - 32° C

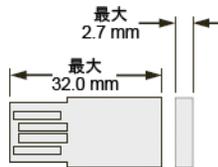
仕様	値
温度 (保管時)	-40 - 158° F -40 - 70° C
湿度	10 - 90% 結露なし
動作時の高度	0 - 10,000 フィート (0 - 3048 m)

内蔵 USB ポート

サーバーモジュールには内蔵 USB ポートが 2 基搭載されています。

内蔵 USB ポートのうち 1 基には、Oracle System Assistant が格納された USB ドライブが事前に取り付けられていることがあります。Oracle System Assistant の詳細は、『Sun Blade X3-2B (旧 Sun Blade X6270 M3) 管理ガイド』を参照してください。

標準 USB 2.0 インタフェースの USB フラッシュドライブは、サードパーティーから入手できます。次の図に示すように、USB フラッシュドライブは、幅 2.7 mm x 長さ 32.0 mm 以内である必要があります：



注意 - このサイズより大きな USB デバイスを使用すると、USB ポートを破損する可能性があります。

関連情報

- 9 ページの「[設置手順について](#)」
- 11 ページの「[サーバーの機能](#)」
- 14 ページの「[サーバーモジュールのフロントパネルとインジケータ](#)」

サーバーモジュールの取り付け

このセクションでは、サーバーモジュールを Sun Blade 6000 シャーシに取り付ける作業に関連するタスクについて説明します。

タスク	リンク
サーバーモジュールを取り付ける準備をします。	19 ページの「サーバーモジュールの取り付け準備」
サーバーモジュールを取り付けます。	23 ページの「サーバーモジュールを取り付ける」

サーバーモジュールの取り付け準備

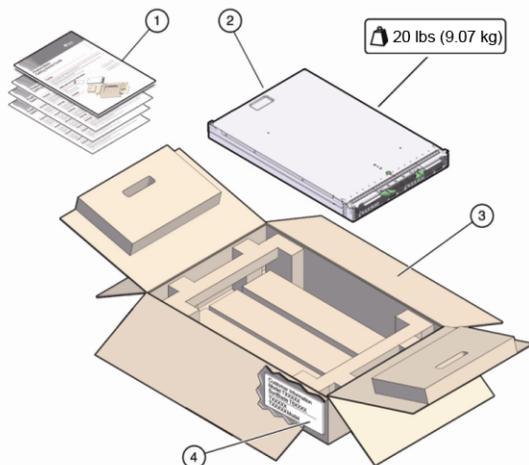
サーバーモジュールを取り付ける前に、次の表に示す情報を確認します。

タスク	リンク
サーバーモジュール出荷キットの内容を確認します。	19 ページの「出荷目録一覧」
ESD および安全性に関する注意事項を確認します。	20 ページの「ESD と安全対策」
追加コンポーネントを取り付けます。	21 ページの「追加コンポーネント」
シャーシを準備します。	22 ページの「シャーシの準備」

出荷目録一覧

サーバーモジュールの標準構成は、工場では組み立てられ、Sun Blade 6000 シリーズシャーシに設置可能な状態で出荷されます。

梱包箱に含まれる標準サーバーコンポーネントは、次のとおりです:



図の番号	説明
------	----

- | | |
|---|-----------|
| 1 | ドキュメント |
| 2 | サーバーモジュール |
| 3 | 箱 |
| 4 | 顧客情報シート |

関連情報

- 94 ページの「システムのシリアル番号の確認」
- 21 ページの「追加コンポーネント」

ESDと安全対策

電子機器は、静電気により損傷する可能性があります。サーバーの設置または保守時には、接地された静電気防止リストストラップ、フットストラップ、または同様の安全器具を使用して、静電放電 (ESD) を防止します。



注意 - システムは損傷する可能性があります。次の ESD 対策を実施して電子部品を静電気損傷から保護してください。静電気損傷が発生すると、システムが永久に使用不能になったり、保守担当者による修理が必要になることがあります。

ESD 予防策:

- コンポーネントは、静電気防止用マット、静電気防止バッグ、使い捨て静電気防止マットなどの静電気防止面の上に置きます。

- システムコンポーネントを取り扱うときは、シャーシの金属面に接続された静電防止用アースストラップを着用してください。

サーバーモジュールを取り付ける前に『Sun Blade X3-2B Safety and Compliance Guide』の安全に関する情報に目を通してください。

注 - このサーバーは、Reduction of Hazardous Substances (RoHS) 指令に完全に準拠しています。

関連情報

- 21 ページの「追加コンポーネント」
- 23 ページの「サーバーモジュールを取り付ける」

追加コンポーネント

標準構成とは別に購入したオプションのサーバーモジュールコンポーネントは、別に出荷されます。オプションコンポーネントの取り付けは、ほとんどの場合、サーバーモジュールをシャーシに設置する前に行う必要があります。

次のオプションのサーバーモジュールコンポーネントを、別途注文および購入できます:

- CPU アセンブリオプション
- DDR3 DIMM メモリーキット
- ハードドライブ
- 半導体ドライブ (SSD)
- USB ドライブ
- ファブリック拡張モジュール (FEM)
- RAID 拡張モジュール (REM)
- マルチポート (またはドングル) ケーブル
- ソフトウェアメディア

ソフトウェアメディアの注文については、97 ページの「サーバーファームウェアとソフトウェアの入手」を参照してください。

サポートされるコンポーネントとそのパーツ番号は、将来通知なしに変更される可能性があります。最新の一覧については、https://support.oracle.com/handbook_private/ を参照してください。

注- このサイトにアクセスするには、Oracle Web アカウントが必要です。

サーバーの名前とモデルをクリックします。表示されたサーバーの製品ページで、「Full Components List」をクリックしてコンポーネントの一覧を表示します。

上部カバーの保守用ラベル、または『Sun Blade X3-2B サービスマニュアル』のコンポーネント取り付け手順を参照してください。

関連情報

- [20 ページの「ESD と安全対策」](#)
- [23 ページの「サーバーモジュールを取り付ける」](#)

シャーシの準備

サーバーモジュールが設置される Sun Blade 6000 モジュラーシステムシャーシが、サポートされているハードウェアとファームウェアで動作し、障害がないことを確認します。次を確認してください:

- ✓ シャーシのミッドプレーンが PCIe 2.0 (モデル A90-B または A90-D では標準) をサポートしていること。ミッドプレーンのバージョン確認方法に関する最新情報については、『Sun Blade 6000 モジュラーシステムご使用にあたって』を参照してください。
- ✓ シャーシ監視モジュール (CMM) では、シャーシモデルと対応する最小ファームウェアバージョンが次のように規定されています:
 - A90-B: CMM ILOM 3.0.12.11b (ソフトウェアリリース 3.3.3)
 - A90-D: CMM ILOM 3.1 (ソフトウェアリリース 4.2)
- ✓ シャーシに必要なすべての電源ケーブルとデータケーブルが接続されていること。
- ✓ 使用しているサーバーモジュールでサポートされている network express module (NEM) がシャーシに取り付けられており、問題なく動作していること。サポートされている NEM の詳細は、『Sun Blade X3-2B (旧 Sun Blade X6270 M3) プロダクトノート』を参照してください。

シャーシコンポーネントの設置、ケーブルのシャーシへの接続、シャーシの電源投入については、次にある Sun Blade 6000 モジュラーシステムシャーシのドキュメントを参照してください: <http://www.oracle.com/pls/topic/lookup?ctx=sb6000>

関連情報

- [23 ページの「サーバーモジュールを取り付ける」](#)

▼ サーバーモジュールを取り付ける

始める前に 19 ページの「サーバーモジュールの取り付け準備」に記載されているすべての手順を実行し、すべての要件を満たします。

- 1 シャーシ内で空いているブレードスロットを見つけ、スロットフィルターパネルを外します。

取り外しアームハンドルの両端をつまんでロックを外し、レバーをオープン位置まで外側に回転させて、フィルターパネルを取り出します。

フィルターパネルはあとで使用するので保管しておきます。



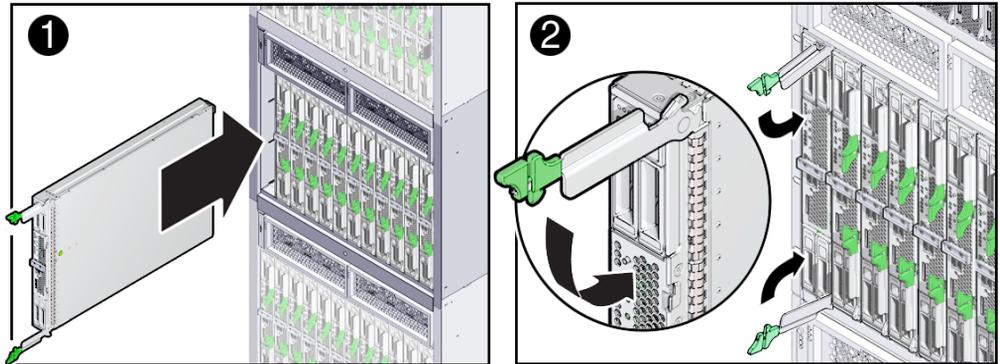
注意-サーバーモジュールをスロットに設置しない場合は、スロットのフィルターパネルを取り外さないでください。スロットのフィルターパネルは、電磁妨害 (EMI) に関する FCC の標準を満たすために必要です。空のスロットがあるシャーシを 60 秒以上動作させないでください。シャーシが停止する可能性を少なくするため、空のスロットには必ずフィルターパネルを挿入してください。

- 2 ブレードのミッドプレーンコネクタから背面カバーを取り外します。
背面カバーの位置については、15 ページの「背面パネルの機能」を参照してください。



注意-落下注意-サーバーモジュールは最大で 22 ポンド (10kg) になる可能性があります。シャーシに対するサーバーモジュールの着脱は両手で行ってください。

- 3 両方のサーバーモジュール取り外しレバーを開き、取り外しレバーが右側にくるようサーバーモジュールを垂直に置きます。
- 4 次のようにしてサーバーを取り付けます:
 - a. サーバーモジュールをスロットに止まるまで押し込み、シャーシ前面と同じ高さになるようにします (1 を参照)。
 - b. サーバーモジュールをシャーシに固定します。上下の取り外しレバーが所定の位置にくるまで、上の取り外しレバーを下向きに回転させ、下部の取り外しレバーを上向きに回転させます (2 を参照)。
これで、サーバーモジュールはシャーシに固定されます。



- 5 サーバーモジュールのLEDが正しく点灯していることを確認します。

サーバーモジュールを電源の入っているシャーシに設置すると、サーバーモジュールのSPがシャーシ電源装置のスタンバイ電源を使用して自動的にブートします。サーバーモジュールのフロントパネルインジケータは、次のように点灯します：

- サーバーモジュールを装着すると、4つのサーバーモジュールLEDがすべて3回点滅します。これは、ブレードに電源が投入され、SPのブートプロセスが開始されたことを示します。
- 緑色のOK/電源LEDがすばやく点滅します。これは、SPがブート中であることを示します(0.125秒オン、0.125秒オフ)。
- SPがブートサイクルを完了すると、緑色のOK/電源LEDが3秒ごとにすばやく点滅し、サーバーモジュールがスタンバイ電源モードであることを示します。

ヒント-フロントパネルのLED情報については、14ページの「サーバーモジュールのフロントパネルとインジケータ」を参照してください。サーバーモジュールのインジケータ、サーバーモジュールの取り外し、電源投入手順、およびフロントパネルのケーブル接続の詳細については、『Sun Blade X3-2B (旧 Sun Blade X6270 M3) サービスマニュアル』を参照してください。

- 次の手順
- 25ページの「サーバーモジュールの配線」
 - 53ページの「ソフトウェアとファームウェアの設定」
 - 31ページの「Oracle ILOM への接続」

サーバーモジュールの配線

選択する配線オプションは、サーバーモジュールの設定方法およびシャーシに取り付ける追加モジュールによって異なります。

注-このセクションで説明する手順では、シャーシに取り付けられ、シャーシのミッドプレーンを介してサーバーモジュールに接続された PCIe Express Modules (PCIe EM) やネットワーク Express Module (NEM) の配線については対象外とします。これらのモジュールの配線手順については、シャーシ、PCIe EM、または NEM のドキュメントを参照してください。

次の表に、従うべき配線手順の決定方法を示します。

作業内容	リンク
Oracle System Assistant を使用してローカルにサーバーを設定します。	26 ページの「3 ケーブルドングルをサーバーモジュールに接続する」 27 ページの「VGA モニターをドングルビデオコネクタに接続する」 28 ページの「キーボードおよびマウスをドングルまたはサーバーモジュールに接続する」
シリアル (ローカル) 接続された Oracle ILOM を使用してサーバーを設定または管理します。	26 ページの「3 ケーブルドングルをサーバーモジュールに接続する」 29 ページの「シリアルデバイスをドングルに接続する」
ネットワーク (リモート) 接続された Oracle ILOM を使用してサーバーを設定または管理します。	29 ページの「CMM NET MGT ポートにケーブルを接続する」

Oracle ILOM への接続方法がわからない場合は、31 ページの「Oracle ILOM への接続」を参照してください。

▼ 3 ケーブルドングルをサーバーモジュールに接続する

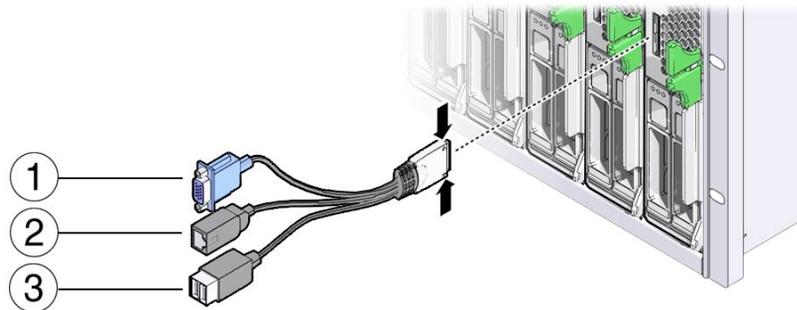
システムのシャーシは次のドングルケーブルが標準で付属しており、これを使用して、通信デバイスを Sun Blade X3-2B に直接接続できます：

3-Cable Dongle II (パート番号 X4622A-N)

このケーブルには、VGA コネクタ、RJ-45 シリアルコネクタ、1つのデュアルUSB コネクタが付いています。

注 - 3-Cable Dongle II は、通常、各 Sun Blade 6000 シリーズのシャーシに付属しています。ケーブルを追加注文することもできます。

- 1 ドングルのユニバーサルコネクタポート (UCP) コネクタをサーバーモジュールの UCP ポートに接続します。



次の表にドングルの接続を示します。

ラベル	コネクタ
1	VGA ビデオコネクタ
2	RJ45 シリアルコネクタ
3	USB コネクタ x2

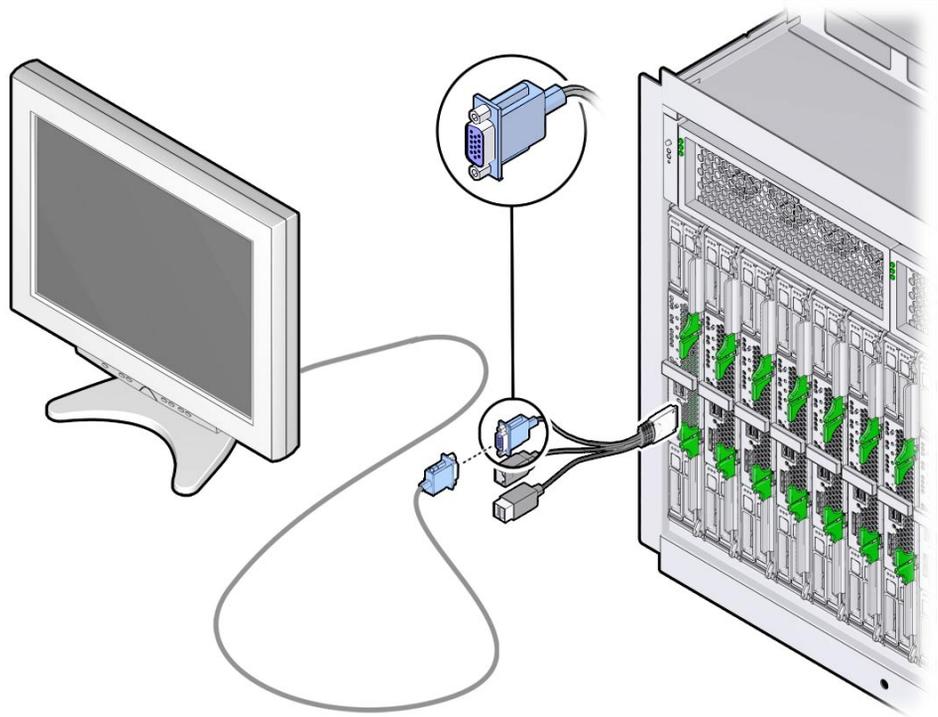
- 2 次の各セクションで説明するとおり、ドングルの各コネクタを必要に応じてデバイスに接続します：
 - 27 ページの「VGA モニターをドングルビデオコネクタに接続する」
 - 28 ページの「キーボードおよびマウスをドングルまたはサーバーモジュールに接続する」
 - 29 ページの「シリアルデバイスをドングルに接続する」



注意-ケーブルまたはコネクタは破損する可能性があります。ドングルケーブルは構成と保守の目的に使用します。構成または保守の操作が終了したら、ケーブルまたはコネクタの損傷を防ぐため、ドングルケーブルをサーバーモジュールから取り外します。

▼ VGA モニターをドングルビデオコネクタに接続する

- 1 サーバーモジュールのフロントパネルにあるユニバーサルコネクタポート (UCP) にドングルケーブルを差し込みます。26 ページの「3 ケーブルドングルをサーバーモジュールに接続する」を参照してください。
- 2 VGA モニターケーブルをドングルのビデオコネクタに接続します。



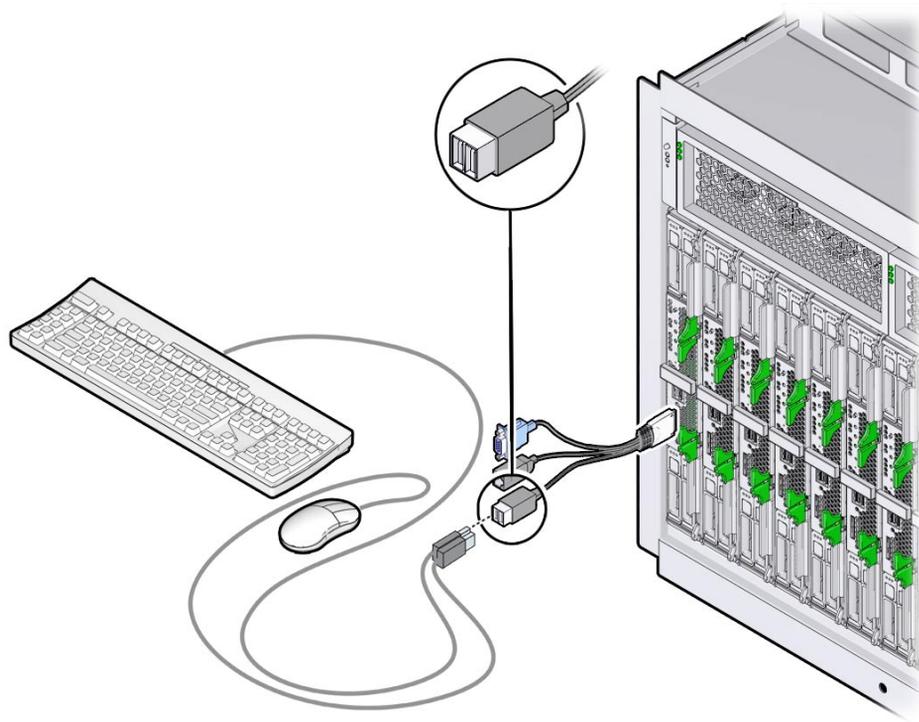
参考 関連情報

- 26 ページの「3 ケーブルドングルをサーバーモジュールに接続する」

- 28 ページの「キーボードおよびマウスを dongle またはサーバーモジュールに接続する」
- 29 ページの「シリアルデバイスを dongle に接続する」

▼ キーボードおよびマウスを dongle またはサーバーモジュールに接続する

- 1 サーバーモジュールのフロントパネルにあるユニバーサルコネクタポート (UCP) に dongle ケーブルを差し込みます。26 ページの「3 ケーブル dongle をサーバーモジュールに接続する」を参照してください。
- 2 キーボードおよびマウスを dongle またはサーバーモジュールフロントパネルの USB コネクタに接続します。

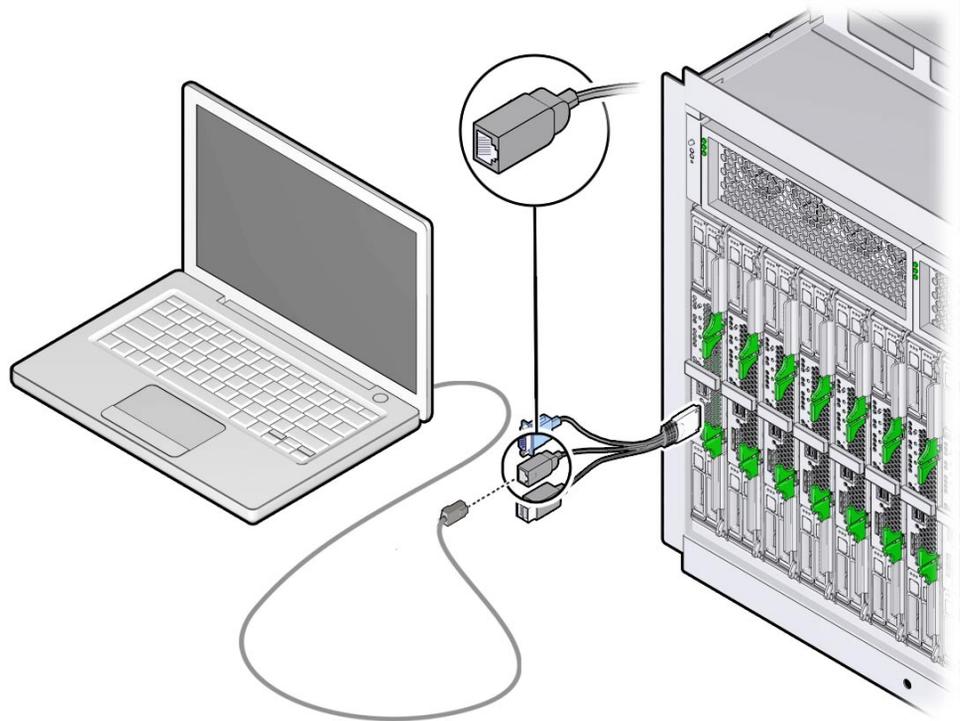


参考 関連情報

- 26 ページの「3 ケーブル dongle をサーバーモジュールに接続する」
- 27 ページの「VGA モニターを dongle ビデオコネクタに接続する」
- 29 ページの「シリアルデバイスを dongle に接続する」

▼ シリアルデバイスを dongle に接続する

- 1 サーバーモジュールのフロントパネルにあるユニバーサルコネクタポート (UCP) に dongle ケーブルを差し込みます。26 ページの「3 ケーブル dongle をサーバーモジュールに接続する」を参照してください。
- 2 端末デバイスまたは端末エミュレータのケーブルを dongle の SER MGT ポートに接続します。



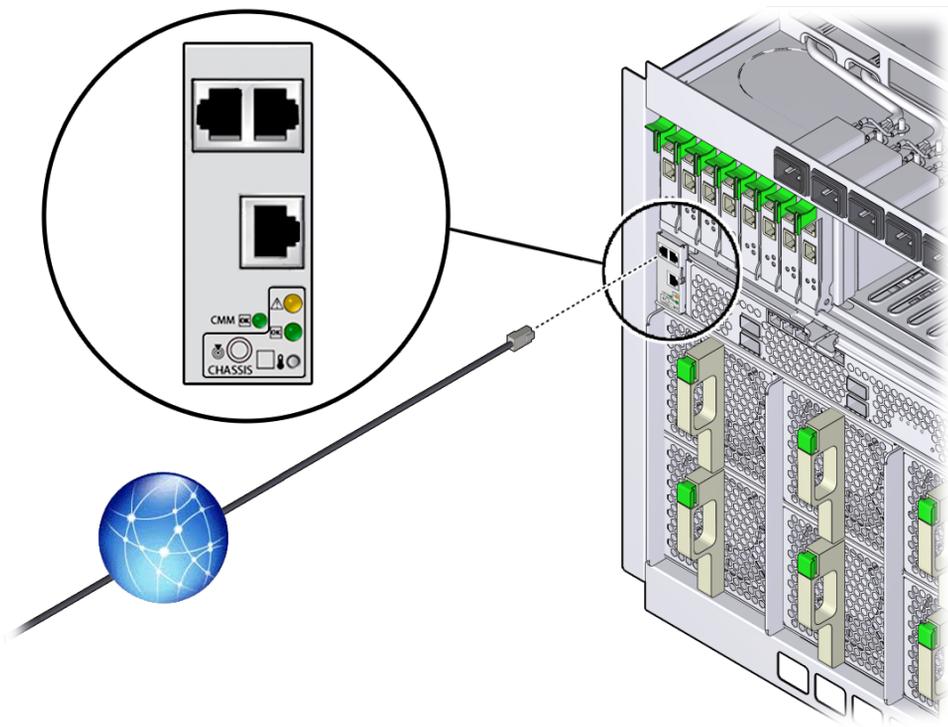
参考 関連情報

- 26 ページの「3 ケーブル dongle をサーバーモジュールに接続する」
- 27 ページの「VGA モニターを dongle ビデオコネクタに接続する」
- 28 ページの「キーボードおよびマウスを dongle またはサーバーモジュールに接続する」

▼ CMM NET MGT ポートにケーブルを接続する

- 1 シャーシ CMM の NET MGT 0 の場所を確認します。

- インターネットに接続されている Ethernet ケーブルを CMM NET MGT 0 ポートに接続します。



参考 関連情報

- 31 ページの「Oracle ILOM への接続」

Oracle ILOM への接続

このセクションでは、Oracle Integrated Lights Out Manager (ILOM) にアクセスし、使用しているサーバーモジュールでサービスプロセッサ (SP) のネットワーク構成を設定する方法を説明します。

次の表に、Oracle ILOM 設定タスクの情報を示します。

タスク	リンク
サーバーモジュールでの Oracle ILOM の使用について説明します。	31 ページの「Oracle ILOM の概要」
Oracle ILOM CMM にログインして、SP の IP アドレスを取得します。	37 ページの「Oracle ILOM SP IP アドレスの特定」
Oracle ILOM にログインします。	43 ページの「サーバーモジュール SP Oracle ILOM へのログイン」
オプション: Oracle ILOM 介してホストコンソールにアクセスします。	47 ページの「Oracle ILOM 経由のサーバーモジュールコンソールへのアクセス」

Oracle ILOM の概要

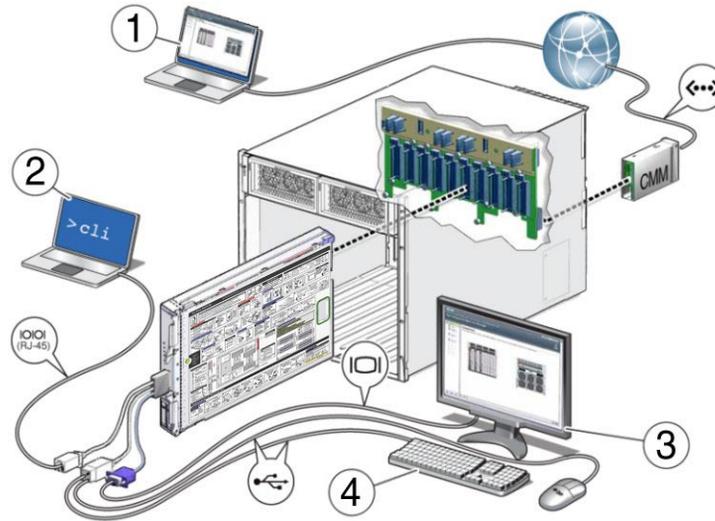
このサーバーは、Oracle Integrated Lights Out Manager (ILOM) バージョン 3.1 以降をサポートしています。Oracle ILOM を使用して Sun Blade X3-2B を管理できます。管理は、シャーシ CMM またはサーバーモジュールのサービスプロセッサを使用して行われます。

次の各セクションで、CMM およびサーバー管理 Oracle ILOM について説明します:

- [32 ページの「接続オプション」](#)
- [33 ページの「Oracle ILOM CMM について」](#)
- [35 ページの「サーバーモジュール SP Oracle ILOM について」](#)

接続オプション

次の図と表に、Oracle ILOM に接続して管理タスクを実行するための方法をいくつか示します。



番号	接続元	接続先	説明
1	(Ethernet) CMM NET MGT ポート	使用しているネットワーク	<p>CMM NET MGT ポートをネットワークに接続します。</p> <p>ネットワークから、CMM の IP アドレスを使用して、CMM 上の Oracle ILOM にログインします。ログインすると、個々のサーバーモジュール SP に移動して、そのサーバーモジュールを管理できます。</p> <p>CMM CLI または Web インタフェースを使用できます。</p>
2	(シリアル接続) サーバーモジュール SP UCP ポート (dongle 必須)	端末デバイス	<p>端末デバイスをサーバーモジュールに接続されている dongle に接続します。</p> <p>CLI を使用して、サーバーモジュール SP 上の Oracle ILOM にログインできます。</p>

番号	接続元	接続先	説明
3、4	(ローカル KVM 接続) サーバーモジュール SP UCP ポート (ドングル必須)	USB キーボードとマウス、および VGA モニター	USB キーボードとマウスをサーバーモジュール上のドングル、またはフロントパネルの USB コネクタに接続します。VGA モニターは、15 ピンのドングルコネクタに接続します。 SP CLI または Web インタフェースを使用して、サーバーモジュール SP 上の Oracle ILOM にログインできます。

Oracle ILOM CMM について

Sun Blade 6000 モジュラーシステムシャーシは、シャーシ監視モジュール (CMM) と呼ばれる専用のサービスプロセッサを備えています。Oracle ILOM CMM は、シャーシを介してサーバーモジュールのサービスプロセッサ (SP) に Ethernet 接続を提供します。

各シャーシモデルに対応する Oracle ILOM CMM ファームウェアの最小バージョンは次のとおりです:

- A90-B: CMM ILOM 3.0.12.11b (ソフトウェアリリース 3.3.3)
- A90-D: CMM ILOM 3.1 (ソフトウェアリリース 4.2)

シャーシの特定方法の詳細は、『[Sun Blade X3-2B \(旧 Sun Blade X6270 M3\) プロダクトノート](#)』を参照してください。

Oracle ILOM CMM ソフトウェアを使用すると、設置されたサーバーブレードやストレージブレードを含むすべてのシャーシコンポーネントの監視と管理を行うことができます。

Oracle ILOM CMM にログインしたときの Web インタフェースの例を次の図に示します。

General Information

Model	SUN BLADE 6008 MODULAR SYSTEM
Serial Number	8060000000000000
System Type	Chassis Manager
System Identifier	-
System Firmware Version	ILOM 3.1.1.3 BIOS updated
Primary Operating System	Not Supported
Host Primary MAC Address	Not Supported
ILOM Address	10.10.10.10
ILOM MAC Address	82:21:29:A4:3D:A8

Actions

Power State: ON

Locate Redundant: OFF

System Firmware Update:

Reboot Console:

Status

Overall Status: ✘ Service Required ✘ Field Problem Count: 6

Subsystem	Status	Details	Inventory
Blade	✘ Service Required		Installed Status (Installed / Maximum): 10 / 10
Power	<input checked="" type="checkbox"/> OK	Powerled Power Consumption: 12901 watts Actual Power Consumption: 1104 watts	PSUs (Installed / Maximum): 2 / 2
Cooling	<input checked="" type="checkbox"/> OK	Inlet Air Temperature: 18 °C Exhaust Air Temperature: Not Supported	Fans (Installed / Maximum): 12 / 12
Storage	⚠ Not Available	Installed Disk Set: Not Available Disk Controller: Not Available	Internal Disks (Installed / Maximum): 0 / 16 Available
IO Modules	✘ Service Required		Installed I/O Modules (Installed / Maximum): 1 / 2

Oracle ILOM CMM にログインした状態で、CMM コマンド行インタフェース (CLI) を使用してサーバーモジュールについての情報を表示する例を次に示します。この例では、サーバーモジュールはシャーシブレードのスロット 1 に取り付けられています。

注-/CH ターゲットは、CMM CLI では、デフォルトで非表示になっています。このターゲットおよびそのサブターゲットを表示するには、次のコマンドを使用します：
/CMM/cli legacy_targets=enable

```
-> show /CH/BL1
```

```
/CH/BL1
Targets:
  HOST
  System
  SP
```

```
Properties:
```

```
Commands:
```

```
cd  
show
```

詳細は、次にあるシステムシャーシのドキュメントを参照してください:

<http://www.oracle.com/pls/topic/lookup?ctx=sb6000>

関連情報

- 37 ページの「Oracle ILOM SP IP アドレスの特定」
- 43 ページの「サーバーモジュール SP Oracle ILOM へのログイン」

サーバーモジュール **SP Oracle ILOM** について

Oracle ILOM ソフトウェアでは、サーバーモジュールサービスプロセッサ (SP) を使用して、次に示すサーバーモジュールコンポーネントの監視および管理操作を実行できます:

- ネットワーク情報の構成
- SP のハードウェア構成の表示と編集
- 重要なシステム情報の監視と記録されたイベントの表示
- Oracle ILOM ユーザーアカウントの管理

Oracle ILOM SP にログインしたときの Web インタフェースの例を次の図に示します。

ORACLE Integrated Lights Out Manager

Manage: Blade 4 User: root Role: CMM Hostname: ORACLECMM-00000000-0000000000

System Information

- Summary
- Processors
- Memory
- Power
- Cooling
- Storage
- Networking
- I/O Modules
- PCI Devices
- Firmware
- Open Problems (3)
- Remote Control
- Host Management
- System Management
- Power Management
- ILOM Administration

Summary
View system summary information. You may also change power state and view system status and fault information.

General Information

Model	SUN BLADE 6000 MODULAR SYSTEM
Serial Number	0000000-0000000000
System Type	Blade
Chassis Model	SUN BLADE 6000 MODULAR SYSTEM
Component Model	Sun Blade X6270 M3
Chassis Address	10.153.55.140
System Identifier	-
System Firmware Version	ILOM: 3.1.0.0 BIOS: 20011300
Primary Operating System	Not Available
Host Primary MAC Address	Not Available
Blade Slot	Slot 4
ILOM Address	0.0.0.0
ILOM MAC Address	00:21:28:DE:43:78

Actions

Power State: OFF

Locator Indicator: OFF

System Firmware Update:

Remote Console:

Status

Overall Status: ✖ Service Required Total Problem Count: 3

Subsystem	Status	Details	Inventory
Processors	✖ Service Required	Processor Architecture: x86 64-bit	Processors (Profile: / Motherboard) 2 / 2

Oracle ILOM SP にログインした状態で、コマンド行インタフェース (CLI) を使用して、入手可能な情報を表示する例を次に示します。この例では、サーバーモジュールとそのシャーシ接続についての情報が示されています。

```
-> show /System
/System
Targets:
  Cooling
  Processors
  Memory
  Power
  Storage
  PCI_Devices
  Firmware
  Networking
  Open_Problems (1)
  BIOS
  IO_Modules
  SP

Properties:
  health = Service Required
  health_details = /SYS (Motherboard) is faulty. Type 'show
                  /System/Open_Problems' for details.
  open_problems_count = 1
  power_state = Off
  locator_indicator = Off
```

```
serial_number = 489089M-1122PR0071
model = ASSY,BLADE,SUN BLADE X6270 M3
type = Blade
system_fw_version = ILOM: 3.1.0.0 BIOS: 20010900
host_primary_ip_address = (none)
host_primary_mac_address = (none)
system_identifier = (none)
primary_operating_system = (none)
actual_power_consumption = 10 watts
ilom_address = 10.134.210.152
ilom_mac_address = 00:21:28:BB:D7:22
action = (none)
```

Commands:

```
cd
reset
show
start
stop
```

詳細については、Oracle ILOM 3.1 のドキュメントを参照してください。

関連情報

- [37 ページの「Oracle ILOM SP IP アドレスの特定」](#)
- [43 ページの「サーバーモジュール SP Oracle ILOM へのログイン」](#)

Oracle ILOM SP IP アドレスの特定

このトピックでは、サーバーモジュールの Oracle ILOM サービスプロセッサ (SP) の IP アドレスを取得する方法を説明します。ネットワークを介してサーバーモジュールの Oracle ILOM に直接アクセスするには、そのサーバーモジュール SP の IP アドレスが必要です。

注- ログインする際にサーバーモジュールのシリアル接続しか使用しない場合、SP の IP アドレスは必要ありません。46 ページの「[Oracle ILOM SP CLI へのログイン \(シリアル接続\)](#)」を参照してください。

サーバーモジュール SP の IP アドレスを取得する、次の各セクションで説明するいずれかの方法を選択します:

- [38 ページの「Oracle ILOM IP アドレスを表示する \(Web\)」](#)
- [41 ページの「Oracle ILOM の IP アドレスを表示する \(CLI\)」](#)

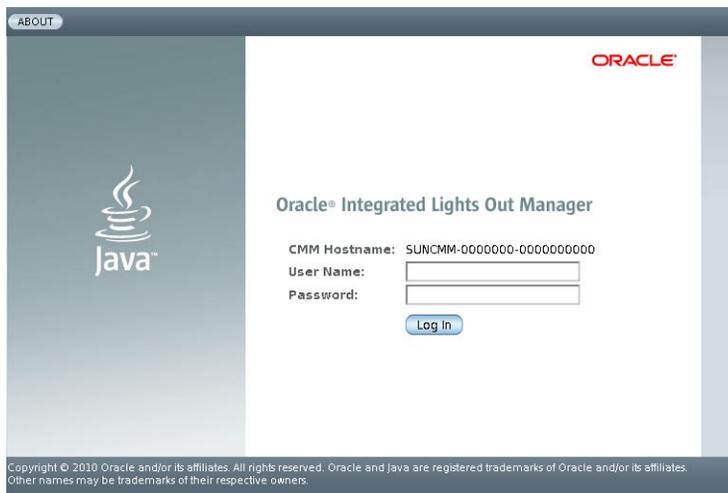
▼ Oracle ILOM IP アドレスを表示する (Web)

サーバーモジュールの Oracle ILOM サービスプロセッサのネットワーク構成 (IP アドレスも含む) を表示するには、シャーシの Oracle ILOM CMM を使用する必要があります。この手順では、サーバーモジュールの Oracle ILOM が正しく機能しており、Oracle ILOM CMM 経由でアクセス可能かどうかを確認します。

始める前に シャーシの CMM は、Ethernet 管理ポートを使用してネットワークに接続されており、構成済みで動作可能な状態である必要があります。そうでない場合は、続行する前に使用しているシャーシのドキュメントを参照してください。

- 1 ログインするには、Web ブラウザのアドレスフィールドに Oracle ILOM CMM の IP アドレスを入力します (例: `http://10.153.55.140`)。

Web インタフェースの「Login」ページが表示されます。



- 2 ユーザー名とパスワードを入力します。

ヒント-デフォルトの Oracle ILOM 管理者アカウントのユーザー名は **root** で、パスワードは **changeme** です。このデフォルトの管理者アカウントが変更されている場合は、システム管理者に連絡して、管理者特権を持つ Oracle ILOM ユーザーアカウントを確認してください。

- 「Log In」をクリックします。
「System Summary」ページが表示されます。

The screenshot displays the Oracle Integrated Lights Out Manager (ILOM) interface. The main content area is titled "Summary" and provides a view of system summary information. The interface includes a navigation menu on the left, a top navigation bar with "Log In", "Refresh", and "Log Out" buttons, and a user information bar.

Summary
View system summary information. You may also change power state and view system status and fault information.

General Information

Model	DLX BLADE 6008 MODULAR SYSTEM
Serial Number	8003000-0000000000
System Type	Oracle Manager
System Identifier	-
System Firmware Version	ILOM 3.11.3-D00-00000000
Primary Operating System	Not Supported
Host Primary MAC Address	Not Supported
ILOM Address	10.151.35.142
ILOM MAC Address	01:21:2F:A4:3D:A8

Actions

Power State: ON [Turn Off](#)

Locate Indicator: OFF [Turn On](#)

System Firmware Update: [Update](#)

Power Control: [Shutdown](#)

Status

Overall Status: ❌ Service Required Total Problem Count: 8

Subsystem	Status	Details	Inventory
Overall	❌ Service Required		Installed Status (Installed / Maximized) 10 / 10
Power	<input checked="" type="checkbox"/> ON	Powered Power Consumption: 12900 watts Actual Power Consumption: 1104 watts	PSUs (Installed / Maximized) 2 / 2
Cooling	<input checked="" type="checkbox"/> OK	Inlet Air Temperature: 16 °C Exhaust Air Temperature: Not Supported	Fans (Installed / Maximized) 12 / 12
Storage	⚠️ Not Available	Installed Disk Size: Not Available Disk Controller: Not Available	Installed Disks (Installed / Maximized) 0 / 168 Available
IO Modules	❌ Service Required		Installed I/O MUs (Installed / Maximized) 1 / 2

- 4 左上のペインにある「Chassis View」をクリックします。
「Chassis View」ページが表示されます。



The screenshot displays the Oracle Integrated Lights Out Manager (ILOM) interface. The top navigation bar includes the title "ORACLE Integrated Lights Out Manager", a warning icon with "2 Warnings", and buttons for "ABOUT", "REFRESH", and "LOG OUT". Below the navigation bar, the "Manage" dropdown is set to "Chassis", and the user information shows "User: root", "Role: CMM", and "Hostname: ORACLEMM-0000000-000000000".

The left sidebar contains a navigation menu with the following items:

- Chassis View (selected)
- System Information
 - Summary
 - Blades
 - Power
 - Cooling
 - Storage
 - I/O Modules
 - Firmware
- Open Problems (6)
- Remote Control
- Host Management
- System Management
- Power Management
- ILOM Administration

The main content area is titled "Chassis View" and includes the instruction: "To manage a Blade or Chassis Monitoring Module, select it in the masthead or click on it in the image below." Below this instruction are two images of server racks. The left image shows a physical view of the server rack with numbered callouts (1, 2, 3, 4, 5, 6, 7) pointing to specific components. The right image shows a top-down view of the server rack with colored callouts (1, 2, 3, 4, 5, 6, 7) pointing to specific components.

Below the images is a "Chassis Inventory" table with the following data:

Component	Name	Part Number	Serial Number
/CH	SUN BLADE 6000 MODULAR SYSTEM	541-4340-02	0000000-0000000000
/CH/CMM	CMM ORACLEMM-0000000-0000000000	541-4340-02	0111APG-1044YC18D9
/CH/BL0	SUN BLADE X6270 SERVER MODULE foo	000-0000-00	0000000000
/CH/BL1	SUN BLADE X6270 M2 SERVER MODULE ORACLESP-1044FMN00B	4713861-11	1044FMN00B
/CH/BL2	SPARC T3-1B ORACLESP-1115NND2RP	30006053+5+1	1115NND2RP
/CH/BL3	SPARC T3-1B SUNSP-1115NND2TU	30006053+5+	1115NND2TU
/CH/BL4	Sun Blade X6270 M3 ORACLESP-489089M+1135PR00CG	7024015	489089M+1135PR00CG
/CH/BL5	X6270 M2 ORACLESP-0328MSL-1043	5111418	0328MSL-1043
/CH/BL6	ASSY_DISKBLADE_VELA	371-2673-01	0000000-0742QCVC05A
/CH/BL7	Sun Blade X6275 M3 ORACLESP-1001BAC013	123-4567-999	1001BAC013

- 表示するシャーシ内のブレードの画像をクリックします。
ブレードの「Summary」ページが表示されます。

The screenshot shows the Oracle Integrated Lights Out Manager (ILOM) interface. The main content area is titled "Summary" and contains the following sections:

- General Information:** A table listing system details.

Model	SUN BLADE 6000 MODULAR SYSTEM
Serial Number	0000000-0000000000
System Type	Blade
Chassis Model	SUN BLADE 6000 MODULAR SYSTEM
Component Model	Sun Blade X6270 M3
Chassis Address	10.153.55.140
System Identifier	-
System Firmware Version	ILOM: 3.1.0.0 BICG: 20011300
Primary Operating System	Not Available
Host Primary MAC Address	Not Available
Blade Slot	Slot 4
ILOM Address	0.0.0.0
ILOM MAC Address	00:21:28:DE:43:78
- Actions:** A panel with several controls:
 - Power State: OFF
 - Locator Indicator: OFF
 - System Firmware Update:
 - Remote Console:
- Status:** A section showing the overall system status.

Overall Status: ✖ Service Required Total Problem Count: 3

Subsystem	Status	Details	Inventory
Processors	✖ Service Required	Processor x86 64-bit	Processors 2 / 2

Oracle ILOM SP アドレスは「General Information」表に「ILOM Address」というラベルで表示されています。

- サーバーモジュールSPのIPアドレスをメモします。
ネットワークを介してサーバーモジュールの Oracle ILOM に直接ログインするには、そのサーバーモジュールSPのIPアドレスを知っている必要があります。サーバーモジュールSPのIPアドレスは、DHCPによって構成されます。

次の手順 ■ 43 ページの「サーバーモジュールSP Oracle ILOM へのログイン」

▼ Oracle ILOM の IP アドレスを表示する (CLI)

各サーバーモジュールの Oracle ILOM サービスプロセッサのネットワーク構成 (IP アドレスも含む) を表示するには、シャーシの Oracle ILOM CMM を使用する必要があります。

この手順では、サーバーモジュールの Oracle ILOM が正しく機能しており、Oracle ILOM CMM 経由でアクセス可能かどうかを確認します。

始める前に シャーシの CMM は、Ethernet 管理ポートを使用してネットワークに接続されており、構成済みで動作可能な状態である必要があります。そうでない場合は、続行する前に使用しているシャーシのドキュメントを参照してください。

- 1 端末ウィンドウを開きます。
- 2 **Secure Shell (SSH)** セッションを使用して、シャーシの **Oracle ILOM CMM** にログインします。

たとえば、次のように入力します:

```
$ ssh username@ CMMIPaddress
```

ここで、*username* は管理者権限を持つユーザーアカウント、*CMMIPaddress* は Oracle ILOM CMM の IP アドレスです。

ヒント-デフォルトの Oracle ILOM 管理者アカウントのユーザー名は **root** で、パスワードは **changeme** です。このデフォルトの管理者アカウントが変更されている場合は、システム管理者に連絡して、管理者特権を持つ Oracle ILOM ユーザーアカウントを確認してください。

Oracle ILOM CMM へのログインに成功すると、Oracle ILOM プロンプト (->) が表示されます。

- 3 次のように入力します:

```
-> show /CH/BL0/SP/network
```

ここで、**BL0** は、このシャーシの Sun Blade X3-2B スロット 0 を表します。Oracle ILOM CMM は、サーバーモジュールの情報 (IP アドレスと MAC アドレスを含む) を表示します。

ブレード 0 のサーバーモジュール情報が表示された例を次に示します:

```
-> show /CH/BL0/SP/network
/CH/BL0/SP/network
Targets:
  interconnect
  ipv6
  test

Properties:
  commitpending = (Cannot show property)
  dhcp_server_ip = 10.134.210.11
  ipaddress = 10.134.210.152
  ipdiscovery = dhcp
  ipgateway = 10.134.210.254
  ipnetmask = 255.255.255.0
```

```

macaddress = 00:21:28:BB:D7:22
managementport = /SYS/SP/NET0
outofbandmacaddress = 00:21:28:BB:D7:22
pendingipaddress = 10.134.210.152
pendingipdiscovery = dhcp
pendingipgateway = 10.134.210.254
pendingipnetmask = 255.255.255.0
pendingmanagementport = /SYS/SP/NET0
sidebandmacaddress = 00:21:28:BB:D7:23
state = enabled

```

Commands:

```

cd
set
show

```

->

- 4 ネットワーク構成(サーバーモジュールの SP の IP アドレスを含む)をメモします。
サーバーモジュールの Oracle ILOM に直接ログインするには、その SP の IP アドレスを知っている必要があります。

サーバーモジュール SP の IP アドレスは、デフォルトでは、DHCP によって構成されます。静的 IP アドレスを設定する方法については、Oracle ILOM 3.1 のドキュメントを参照してください。
- 5 Oracle ILOM CMM からログアウトするには、次のコマンドを入力します:
-> **exit**

次の手順 ■ [43 ページの「サーバーモジュール SP Oracle ILOM へのログイン」](#)

サーバーモジュール SP Oracle ILOM へのログイン

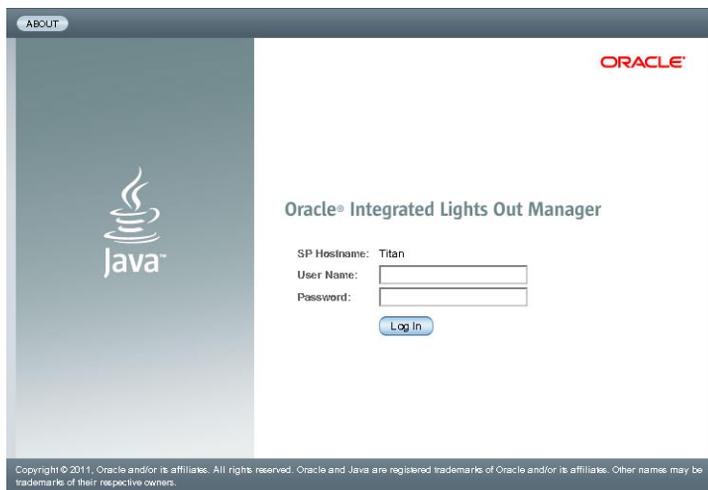
このセクションでは、サーバーモジュールのサービスプロセッサ (SP) Oracle ILOM にアクセスするいくつかの方法を説明します。次の各セクションで説明します:

- [43 ページの「Oracle ILOM SP Web インタフェースへのログイン \(Ethernet 接続\)」](#)
- [45 ページの「Oracle ILOM SP CLI へのログイン \(Ethernet 接続\)」](#)
- [46 ページの「Oracle ILOM SP CLI へのログイン \(シリアル接続\)」](#)

▼ Oracle ILOM SP Web インタフェースへのログイン (Ethernet 接続)

- 始める前に ■ 応答時間を短縮するため、Web ブラウザのプロキシサーバーを使用している場合は無効にしてください。

- サーバーモジュールの SP の IP アドレスがわからない場合は、[38 ページ](#)の「[Oracle ILOM IP アドレスを表示する \(Web\)](#)」を参照し、Oracle ILOM CMM を使用して IP アドレスを特定する方法を確認してください。
- 1 ログインするには、**Web** ブラウザで、サーバーモジュールの **Oracle ILOM** の IP アドレスを入力します。
Web インタフェースの「Login」ページが表示されます。



- 2 ユーザー名とパスワードを入力します。

ヒント - デフォルトの Oracle ILOM 管理者アカウントのユーザー名は **root** で、パスワードは **changeme** です。このデフォルトの管理者アカウントが変更されている場合は、システム管理者に連絡して、管理者特権を持つ Oracle ILOM ユーザーアカウントを確認してください。

- 3 「Log In」をクリックします。
「Summary」ページが表示されます。

ORACLE Integrated Lights Out Manager
User: root Role: auroc SP Hostname: Titan

▼ System Information
Summary
 Processors
 Memory
 Power
 Cooling
 Storage
 Networking
 I/O Modules
 PCI Devices
 Firmware
 Open Problems (1)
 Remote Control
 Host Management
 System Management
 Power Management
 ILOM Administration]

Summary
View system summary information. You may also change power state and view system status and fault information.

General Information

Model	ASSY, BLADE, MENSA
Serial Number	489089M-1122PR0071
System Type	Blade
System Identifier	-
System Firmware Version	ILOM: 3.1.0.0 BIOS: 20010900
Primary Operating System	-
Host Primary MAC Address	-
Blade Slot	-
ILOM Address	10.134.210.152
ILOM MAC Address	00:21:28:BB:D7:22

Actions

Power State: OFF

Locator Indicator: OFF

Oracle System Assistant
Version: 0.0.0.0

System Firmware Update

Remote Console

Status
Overall Status: ✖ Service Required Total Problem Count: 1

Subsystem	Status	Details	Inventory
Processors	✔ CK	Processor Architecture: x86 64-bit Processor Summary: 2 Intel Xeon Processor E5 Series	Processors (Installed / Maximum): 2 / 2
Memory	✔ CK	Installed RAM Size: 192 GB	DIMMs (Installed / Maximum): 24 / 24
Power	✔ CK	Permitted Power Consumption: 617 watts Actual Power Consumption: 10 watts	PSUs (Installed / Maximum): 2 / 2
Cooling	✔ CK	Inlet Air Temperature: 20 °C Exhaust Air Temperature: 20 °C	Fans (Installed / Maximum): 12 / 12
Storage	⚠ Not Available	Installed Disk Size: Not Available Disk Controllers: Not Available	Internal Disks (Installed / Maximum): 0 / 4
Networking	✔ CK		Installed Ethernet NICs: 2
I/O Modules	✔ CK		Installed FEMs (Installed / Maximum): 2 / 2

これで、サーバーモジュールの Oracle ILOM にログインしました。

Oracle ILOM Web インタフェースの使用方法の詳細は、Oracle ILOM 3.1 のドキュメントライブラリを参照してください。

- 次の手順
- 47 ページの「Oracle ILOM 経由のサーバーモジュールコンソールへのアクセス」
 - 71 ページの「インストール済み Oracle Solaris OS の構成」
 - 79 ページの「インストール済み Oracle VM ソフトウェアの構成」

▼ Oracle ILOM SP CLI へのログイン (Ethernet 接続)

始める前に サーバーモジュールの SP の IP アドレスがわからない場合は、41 ページの「Oracle ILOM の IP アドレスを表示する (CLI)」を参照し、Oracle ILOM CMM を使用して IP アドレスを特定する方法を確認してください。

- 1 端末ウィンドウを開きます。
- 2 **Secure Shell (SSH)** セッションを使用して、サーバーモジュールの **Oracle ILOM SP** にログインします。
たとえば、次のように入力します:

```
$ ssh username@ SPIAddress
```

username は管理者特権を持つユーザーアカウントで、*SPIAddress* はサーバーモジュールサービスプロセッサの IP アドレスです。

ヒント-デフォルトの Oracle ILOM 管理者アカウントのユーザー名は **root** で、パスワードは **changeme** です。このデフォルトの管理者アカウントが変更されている場合は、システム管理者に連絡して、管理者特権を持つ Oracle ILOM ユーザーアカウントを確認してください。

サーバーモジュールの Oracle ILOM へのログインに成功すると、Oracle ILOM プロンプト (->) が表示されます。

CLI インタフェースを使用して Oracle ILOM を構成する方法の詳細は、Oracle ILOM 3.1 のドキュメントを参照してください。

- 次の手順
- [47 ページの「Oracle ILOM 経由のサーバーモジュールコンソールへのアクセス」](#)
 - [71 ページの「インストール済み Oracle Solaris OS の構成」](#)
 - [79 ページの「インストール済み Oracle VM ソフトウェアの構成」](#)

▼ Oracle ILOM SP CLI へのログイン(シリアル接続)

この手順を実行するには、操作員がサーバーモジュールの近くに実際に居る必要があります。シリアル接続を使用して Oracle ILOM にログインする場合、SP の IP アドレスは必要ありません。

始める前に マルチポートケーブル(dongle と呼ばれる)が必要です。マルチポートケーブルを使用すると、ノードホストまたは SP コンソールに直接接続できます。マルチポートケーブルは、Sun Blade 6000 モジュラーシステムシャーシに標準装備されていることもあります。

- 1 次の各セクションで説明する手順に従ってサーバーモジュールのケーブルを接続します:
 - a. [26 ページの「3 ケーブル dongle をサーバーモジュールに接続する」](#)
 - b. [29 ページの「シリアルデバイスを dongle に接続する」](#)

- 2 使用している端末で、次のシリアル通信設定が構成されていることを確認します:
 - 8N1: データビット 8、パリティなし、ストップビット 1
 - 9600 ボー (デフォルト設定 - 変更不可)
 - ハードウェアフロー制御を無効化 (CTS/RTS)
- 3 **Enter** を押して、サーバーの **Oracle ILOM** へのシリアルコンソール接続を確立します。Oracle ILOM のログインプロンプトが表示されます。例:
`SP-productserialnumber login:`
- 4 管理者アカウントを使用して、**Oracle ILOM CLI** にログインします。管理者アカウントのユーザー名とパスワードを入力します。

ヒント - デフォルトの Oracle ILOM 管理者アカウントのユーザー名は **root** で、パスワードは **changeme** です。このデフォルトの管理者アカウントが変更されている場合は、システム管理者に連絡して、管理者特権を持つ Oracle ILOM ユーザーアカウントを確認してください。

Oracle ILOM CLI のプロンプト (->) が表示されます。

これで、サーバーモジュールの Oracle ILOM にログインしました。

CLI インタフェースを使用して Oracle ILOM を構成する方法の詳細は、Oracle ILOM 3.1 のドキュメントライブラリを参照してください。

- 次の手順
- [47 ページの「Oracle ILOM 経由のサーバーモジュールコンソールへのアクセス」](#)

Oracle ILOM 経由のサーバーモジュールコンソールへのアクセス

Oracle ILOM 経由でサーバーモジュールのホストコンソールに接続すると、実際にホストの前に居るように操作を実行できます。この接続方法は、サーバーの BIOS 設定プログラムへのリモートアクセスが必要な場合や、サーバーに OS やその他のソフトウェアを構成またはインストールする場合に役立ちます。

次のいずれかの方法を選択します:

- Oracle ILOM コマンド行インタフェース経由でシリアルコンソールを使用します。48 ページの「サーバーモジュールシリアルコンソールに接続する (CLI)」を参照してください。
- ILOM Web インタフェースのリモートコンソール機能を使用します。48 ページの「リモートコンソールを使用してサーバーモジュールに接続する」を参照してください。

▼ サーバーモジュールシリアルコンソールに接続する (CLI)

- 1 管理者権限のあるアカウントを使用して、サーバーモジュールの **Oracle ILOM** にログインします。

前述した次のいずれかの方法を使用します:

- 46 ページの「[Oracle ILOM SP CLI へのログイン \(シリアル接続\)](#)」の説明に従って、シリアル管理ポートを使用します。
- クライアントシステムを使用して、ネットワーク経由で SSH セッションを確立します。45 ページの「[Oracle ILOM SP CLI へのログイン \(Ethernet 接続\)](#)」を参照してください。

- 2 ホストシリアルコンソールにアクセスするには、次のように入力します:

```
-> start /HOST/console
```

シリアルコンソールの出力が画面上に表示されます。

注 - シリアルコンソールが使用中の場合は、**stop /HOST/console** コマンドでコンソールセッションを停止してから、**start /HOST/console** コマンドを入力します。

- 3 **Oracle ILOM** コンソールに戻るには、**ESC** キーの後に "(" キー (**Shift + 9**) を押します。

次の手順

- 71 ページの「[インストール済み Oracle Solaris OS の構成](#)」
- 79 ページの「[インストール済み Oracle VM ソフトウェアの構成](#)」

▼ リモートコンソールを使用してサーバーモジュールに接続する

始める前に リモートシステムからホストコンソールに接続するには、リモートシステムで次の要件が満たされている必要があります:

- Oracle Solaris、Linux、または Windows などのオペレーティングシステムがインストールされていること。
- CMM の Ethernet 管理ポートにアクセスできるネットワークにシステムが接続されている。
- Java Runtime Environment (JRE) 1.5 以降がインストールされていること。CD-ROM リダイレクションの場合は、32 ビット Java を使用する必要があります。

- リモートコンソールシステムが Oracle Solaris OS を実行している場合は、リモートコンソールから物理フロッピーディスクドライブと CD/DVD-ROM ドライブにアクセスできるように、ボリューム管理を無効にする。
- リモートコンソールシステムが Windows を実行している場合は、Internet Explorer の拡張セキュリティー機能を無効にすること。
- リモートコンソールシステムと Oracle ILOM のサービスプロセッサが Oracle ILOM 3.1 のドキュメントに記載された手順に従って設定されている。

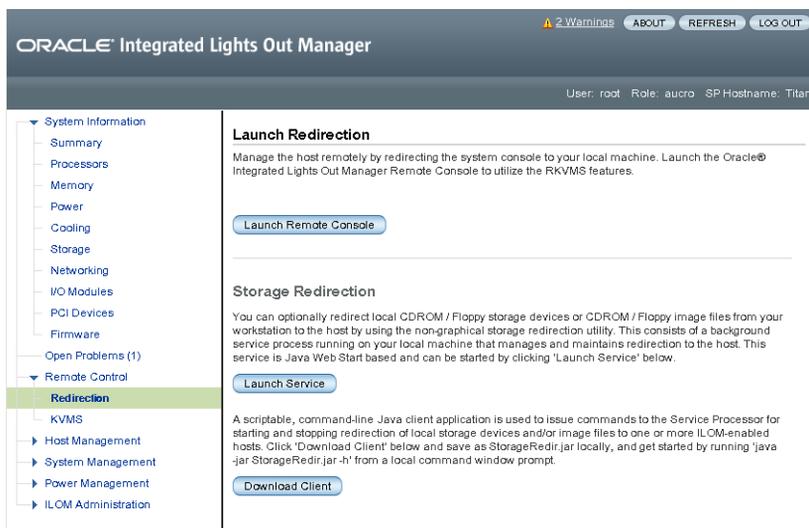
1 Web ブラウザで、サーバーモジュールの **Oracle ILOM** にログインします。

43 ページの「[Oracle ILOM SP Web インタフェースへのログイン \(Ethernet 接続\)](#)」を参照してください。

2 「**Remote Control**」 > 「**Redirection**」 をクリックします。

「Launch Redirection」画面が表示されます。

注 - 「Mouse Mode Settings」タブでマウスモードが絶対モードに設定されていることを確認します。



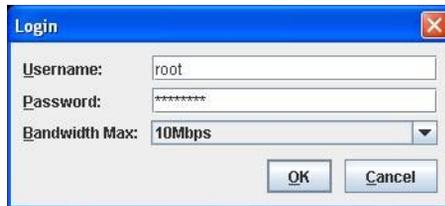
3 「**Launch Remote Console**」 をクリックします。

次の点に注意してください:

- リモートコンソールシステムのリダイレクションに Windows システムを使用している場合、「Launch Remote Console」をクリックしたあとに、「Hostname Mismatch」警告ダイアログボックスが表示されることがあります。その場合、「Yes」ボタンをクリックして消去します。

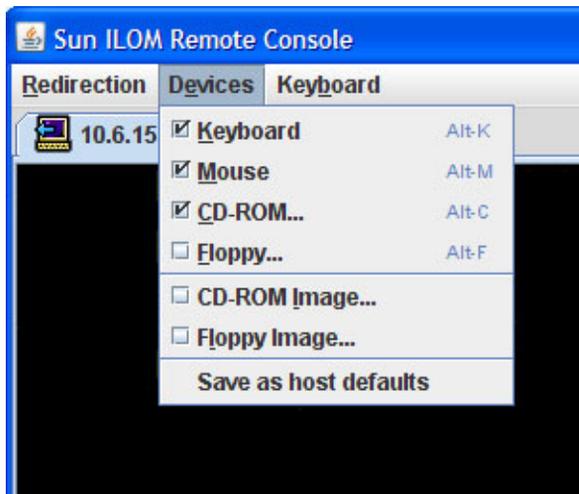


- 「Remote Control」ログインダイアログボックスが表示されることがあります。その場合、ユーザー名とパスワードを再入力して「OK」をクリックします。



JavaRConsole 画面が表示されます。

- 4 リモートシステム上のデバイスをホストコンソールにリダイレクトするために、「Devices」メニューから適切な項目を選択します。



- リモートの物理フロッピーディスク - 「Floppy」を選択すると、リモートシステムに接続された物理フロッピードライブにサーバーがリダイレクトされます。
- リモートフロッピーイメージ - 「Floppy Image」を選択すると、リモートシステム上にあるフロッピーイメージファイルにサーバーがリダイレクトされます。
- リモートの物理 CD/DVD - 「CD-ROM」を選択すると、リモートシステムに接続された CD/DVD ドライブ内の CD/DVD にサーバーがリダイレクトされます。
- リモートの CD/DVD イメージ - 「CD-ROM Image」を選択すると、リモートシステム上にある .iso イメージファイルにサーバーがリダイレクトされます。

注-いずれかの CD/DVD オプションを使用してサーバー上にソフトウェアをインストールすると、コンテンツへのアクセスがネットワーク経由で行われるため、インストールの所要時間が大幅に増加します。インストールの所要時間は、ネットワークの接続状態とトラフィックによって異なります。

- 次の手順
- 47 ページの「Oracle ILOM 経由のサーバーモジュールコンソールへのアクセス」
 - 71 ページの「インストール済み Oracle Solaris OS の構成」
 - 79 ページの「インストール済み Oracle VM ソフトウェアの構成」

ソフトウェアとファームウェアの設定

Oracle System Assistant は、システムのソフトウェアとファームウェアを設定するためのもっとも簡単な方法です。Oracle System Assistant が使用しているサーバーモジュールに組み込まれていない場合、あるいは、Oracle ILOM または Hardware Management Pack を使用してシステムを設定する場合、詳細な設定手順については、『[Sun Blade X3-2B \(旧 Sun Blade X6270 M3\) 管理ガイド](#)』を参照してください。

このセクションでは、次の表に示すとおり、ソフトウェアとファームウェアの設定について説明します。

タスク	リンク
Oracle ILOM から、またはローカルで、Oracle System Assistant を起動します。	53 ページの「Oracle System Assistant へのアクセス」
Oracle System Assistant を使用して一般的な設定タスクを実行します。	57 ページの「ソフトウェアとファームウェアを設定する (Oracle System Assistant)」
オペレーティングシステムとドライバの構成およびインストール用オプションについて説明します。	58 ページの「オペレーティングシステムおよびドライバのセットアップ」

Oracle System Assistant へのアクセス

Oracle System Assistant は、Oracle x86 サーバーの初期サーバーセットアップおよび保守作業を行うためのタスクベースのサーバープロビジョニングツールです。Oracle System Assistant を使用すると、サポートされている Oracle VM、Linux、または Windows オペレーティングシステムのインストール、サーバーの最新ソフトウェアリリースへの更新、サーバーハードウェアの構成を行うことができます。

次の各トピックに示す手順では、Oracle System Assistant にアクセスするためのさまざまな方法について説明します：

- [54 ページの「Oracle System Assistant を起動する \(Oracle ILOM\)」](#)
- [55 ページの「Oracle System Assistant を起動する \(ローカル\)」](#)

▼ Oracle System Assistant を起動する (Oracle ILOM)

- 1 サーバーがスタンバイ電源モードになっていることを確認します。
サーバースタンバイモードでは、電源/OK LED がゆっくり点滅します。
- 2 サーバーモジュール SP Oracle ILOM Web インタフェースにログインします。
43 ページの「Oracle ILOM SP Web インタフェースへのログイン (Ethernet 接続)」を参照してください。

「System Summary」画面が表示されます。

ORACLE Integrated Lights Out Manager

User: root Role: auro SP Hostname: Titan

Summary

View system summary information. You may also change power state and view system status and fault information.

General Information		Actions	
Model	ASSY_BLADE_MENSA	Power State	<input type="checkbox"/> OFF <input type="button" value="Turn On"/>
Serial Number	489089M-1122PR0071	Locator Indicator	<input type="checkbox"/> OFF <input type="button" value="Turn On"/>
System Type	Blade	Oracle System Assistant Version: 0.0.0.0	<input type="button" value="Launch"/>
System Identifier	-	System Firmware Update	<input type="button" value="Update"/>
System Firmware Version	ILOM: 3.1.0.0 BIOS: 20010900	Remote Console	<input type="button" value="Launch"/>
Primary Operating System	-		
Host Primary MAC Address	-		
Blade Slot	-		
ILOM Address	10.134.210.152		
ILOM MAC Address	00:21:28:BB:D7:22		

Status

Overall Status: ✖ Service Required Total Problem Count: 1

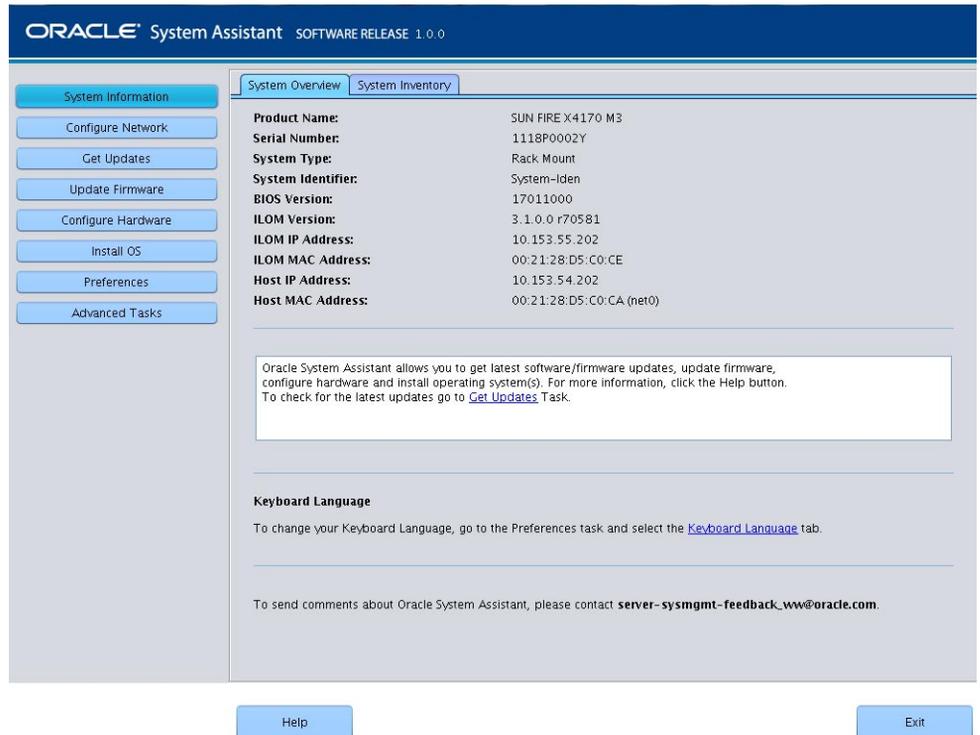
Subsystem	Status	Details	Inventory
Processors	✔ OK	Processor Architecture: x86 64-bit Processor Summary: 2 Intel Xeon Processor E5 Series	Processors (Installed / Maximum): 2 / 2
Memory	✔ OK	Installed RAM Size: 192 GB	DIMMs (Installed / Maximum): 24 / 24
Power	✔ OK	Permitted Power Consumption: 617 watts Actual Power Consumption: 10 watts	PSUs (Installed / Maximum): 2 / 2
Cooling	✔ OK	Inlet Air Temperature: 20 °C Exhaust Air Temperature: 20 °C	Fans (Installed / Maximum): 12 / 12
Storage	⚠ Not Available	Installed Disk Size: Not Available Disk Controllers: Not Available	Internal Disks (Installed / Maximum): 0 / 4
Networking	✔ OK		Installed Ethernet NICs: 2
I/O Modules	✔ OK		Installed FEMs (Installed / Maximum): 2 / 2

Oracle System Assistant の「Launch」ボタンは右上のパネルにあります。

- 3 「Launch」をクリックします。

- 4 **JavaRConsole** セッションを実行するかどうかを尋ねるダイアログボックスで、「Yes」をクリックします。

サーバーモジュールの電源が入り、Oracle System Assistant アプリケーションがブートし、アプリケーションのメイン画面が表示されます。



- 次の手順
- 57 ページの「ソフトウェアとファームウェアを設定する (Oracle System Assistant)」

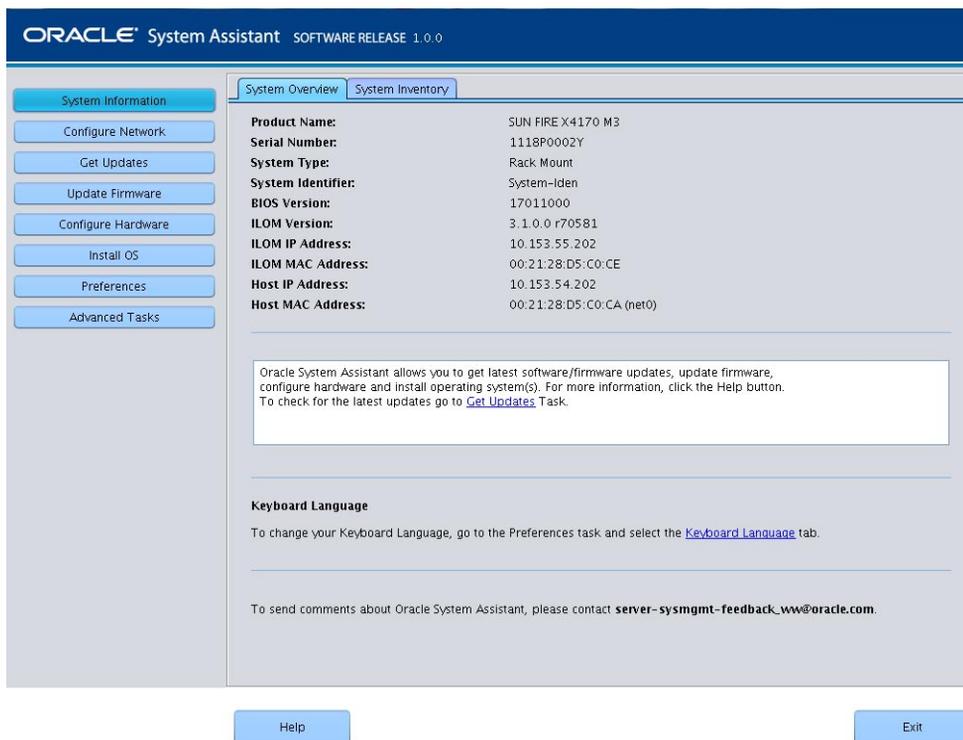
▼ Oracle System Assistant を起動する (ローカル)

Oracle System Assistant をローカルで起動するには、操作員がサーバーの近くに実際に居て、次に対するアクセス権を保有している必要があります:

- 3 ケーブルドングル
- VGA モニター
- キーボードとマウス

- 1 サーバーがスタンバイ電源モードになっていることを確認します。
サーバースタンバイモードでは、電源/OK LED がゆっくり点滅します。

- 2 次の手順に従ってサーバーモジュールにローカルで接続します:
 - a. 26 ページの「3 ケーブルドングルをサーバーモジュールに接続する」
 - b. 27 ページの「VGA モニターをドングルビデオコネクタに接続する」
 - c. 28 ページの「キーボードおよびマウスをドングルまたはサーバーモジュールに接続する」
- 3 フロントパネルの電源ボタンを押して、サーバーに電力を投入し全電力モードにします。
サーバーがブートし、モニターに POST メッセージが表示されます。
- 4 プロンプトが表示されたら **F9** キーを押します。
Oracle System Assistant アプリケーションが起動し、アプリケーションのメイン画面が表示されます。



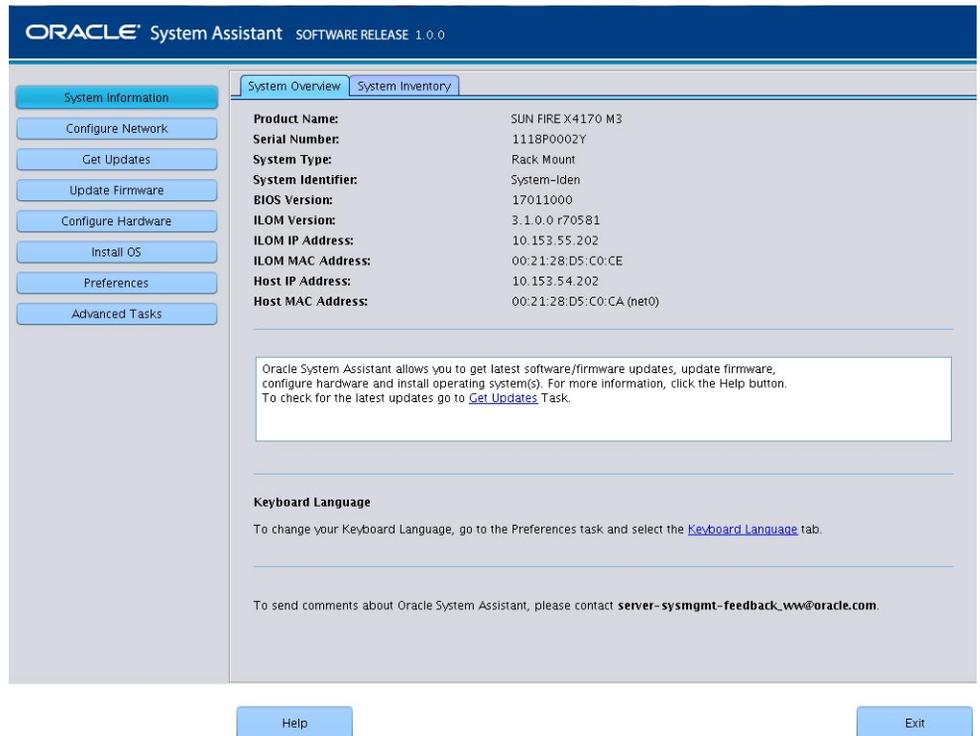
- 次の手順
- 57 ページの「ソフトウェアとファームウェアを設定する (Oracle System Assistant)」

▼ ソフトウェアとファームウェアを設定する (Oracle System Assistant)

1 次のいずれかのトピックの手順に従って、**Oracle System Assistant** を起動します:

- 54 ページの「[Oracle System Assistant を起動する \(Oracle ILOM\)](#)」
- 55 ページの「[Oracle System Assistant を起動する \(ローカル\)](#)」

Oracle System Assistant アプリケーションが起動し、アプリケーションのメイン画面が表示されます。



2 **Oracle System Assistant** アプリケーションを使用して、次の表に示した順番にタスクを実行します。

Oracle System Assistant の使用法の詳細は、『[Sun Blade X3-2B \(旧 Sun Blade X6270 M3\) 管理ガイド](#)』または Oracle System Assistant 組み込みのヘルプを参照してください。

手順	タスク	Oracle System Assistant の画面
1	Oracle System Assistant ネットワーク接続を設定します。	Network Configuration
2	最新のソフトウェアとファームウェアのアップデートを入手します。	Get Updates
3	Oracle ILOM、BIOS、ディスクエクスパンダ、HBA ファームウェアを必要に応じて更新します。	ファームウェアの更新
4	Oracle ILOM を構成します。	「Configure Hardware」 > 「Service Processor Configuration」
5	RAID を構成します。	「Configure Hardware」 > 「RAID Configuration」
6	Linux または Windows OS、あるいは Oracle VM ソフトウェアをインストールします。 注 - 詳細は、58 ページの「オペレーティングシステムおよびドライバのセットアップ」、またはインストールする OS の OS インストールガイドを参照してください。	Install OS

- 次の手順
- 58 ページの「オペレーティングシステムおよびドライバのセットアップ」
 - 71 ページの「インストール済み Oracle Solaris OS の構成」
 - 79 ページの「インストール済み Oracle VM ソフトウェアの構成」

オペレーティングシステムおよびドライバのセットアップ

インストール済みのオペレーティングシステム (OS) を構成するか、使用しているサーバーでサポートされている OS をインストールします。次の表に、OS のインストールと構成に関する情報の入手方法を示します。

目的	構成またはインストールする OS	使用するツールまたはドキュメント
インストール済みの OS の構成	Oracle Solaris OS または Oracle VM	71 ページの「インストール済み Oracle Solaris OS の構成」または 79 ページの「インストール済み Oracle VM ソフトウェアの構成」を参照してください。

目的	構成またはインストールする OS	使用するツールまたはドキュメント
OS のインストール	Oracle VM、Windows、または Linux OS	Oracle System Assistant
	Oracle Solaris OS または VMware ESX	OS のインストールガイド
OS ドライバのインストール	サポートされている任意の OS	OS のインストールガイド

関連情報

- [57 ページの「ソフトウェアとファームウェアを設定する \(Oracle System Assistant\)」](#)

オペレーティングシステムをインストールするストレージデバイスの準備

サーバーモジュール上にオペレーティングシステムをインストールする場合は、Oracle System Assistant を使用してボリュームを作成することによってハードドライブを準備する必要があります。Oracle System Assistant がインストールされていない場合は、LSI BIOS 構成ユーティリティを使用して手動でドライブを準備します。

OS のインストール後に RAID ボリュームを作成する方法の詳細は、『[Sun Blade X3-2B \(旧 Sun Blade X6270 M3\) 管理ガイド](#)』を参照してください。

注-インストール済みのオペレーティングシステムを構成する場合は、このセクションを読み飛ばして、使用しているサーバーモジュール上に事前構成された OS について説明したセクションに進んでください。

このセクションでは、特定の OS 向けにサーバーのハードドライブを準備する方法について説明します:

説明	リンク
サーバーモジュールでサポートされているホストバスアダプタについて説明します。	61 ページの「サポートされているホストバスアダプタ」
ボリュームを作成し、必要に応じて HBA のブートドライブを設定します。	65 ページの「ストレージドライブを準備する (Oracle System Assistant)」
仮想ドライブを SAS6-R-REM-Z HBA からブート可能にします	67 ページの「仮想ドライブをブート可能にする (LSI WebBIOS ユーティリティ)」

サポートされているホストバスアダプタ

次の各セクションでは、ハードドライブを準備する際のオプションについて説明します。使用しているサーバーモジュールに取り付けられている HBA に対応するセクションに進んでください:

- [62 ページの「SG-SAS6-REM-Z ホストバスアダプタ」](#)
- [63 ページの「SG-SAS6-R-REM-Z ホストバスアダプタ」](#)

SG-SAS6-REM-Z ホストバスアダプタ

サーバーに Sun Storage 6 Gb SAS REM HBA (SG-SAS6-REM-Z) ホストバスアダプタ (HBA) がインストールされている場合は、このセクションの説明に従って、OS のインストール先ストレージドライブを準備してください。

注 - ドライブが SG-SAS6-REM-Z HBA に接続されている場合は、RAID ボリュームを作成しなくても、個々のディスク上にオペレーティングシステムをインストールできます。そうしたディスクは、システム BIOS にブート可能なディスクとして表示されます。ただし、そうしたディスクで RAID ボリュームを作成してからオペレーティングシステムをインストールする場合は、このセクションに示す手順に従ってください。

RAID ボリュームの作成に使用できるオプションについては、次の各トピックで説明します:

- 62 ページの「Oracle System Assistant」
- 62 ページの「LSI SAS 2 BIOS 構成ユーティリティ」

Oracle System Assistant

Oracle System Assistant は、RAID 0 ボリュームを作成するためのもっとも簡単な方法です。次の表に、Oracle System Assistant が HBA を参照するために使用する名前と、Oracle System Assistant による HBA サポートの内容を示します。

Oracle System Assistant 名	Oracle System Assistant でのサポート
SGXSAS6INTZ	<ul style="list-style-type: none"> ■ 2 台以上のハードドライブによる RAID 0 をサポートします ■ ブート可能なドライブの表示または設定はできません ■ ディスク状態 (良、不良、ホットスベア) の表示はできません

Oracle System Assistant でストレージドライブを準備するための手順については、65 ページの「ストレージドライブを準備する (Oracle System Assistant)」を参照してください。

LSI SAS 2 BIOS 構成ユーティリティ

LSI SAS 2 BIOS 構成ユーティリティは HBA ファームウェアに組み込まれています。

OS をインストールする前に LSI SAS 2 BIOS 構成ユーティリティを使用して RAID ボリュームを作成するのは次のような場合です:

- ディスクに OS をインストールする前に RAID ボリュームを作成したい。

- サーバーに Oracle System Assistant がインストールされていないか、Oracle System Assistant を使いたくない。
- OS のインストール先ドライブを使用して RAID ボリュームレベル 1 または 10 を作成したい (Oracle System Assistant は、SG-SAS6-REM-Z については、RAID 0 のみをサポート)。

次の LSI ドキュメントに、LSI SAS2 BIOS 構成ユーティリティーを使用してボリュームを作成するための手順が掲載されています: 『SAS Integrated RAID Solutions User's Guide』。このドキュメントは、次の URL で入手できます:

http://www.lsi.com/sep/Pages/oracle/sg_x_sas6-rem-z.aspx

SG-SAS6-R-REM-Z ホストバスアダプタ

サーバーに Sun Storage 6 Gb SAS REM RAID HBA (SG-SAS6-R-REM-Z) HBA がインストールされている場合は、このセクションの説明に従って、OS のインストール先ストレージドライブを準備してください。

注-SG-SAS6-R-REM-Z HBA を使用する場合は、OS をインストールする前にボリュームを作成しなければなりません。システム BIOS は SG-SAS6-R-REM-Z に接続されたドライブを認識しません (ただし、そのドライブがボリュームの一部である場合はこのかぎりではありません)。HBA に 2 つ以上のボリュームが接続されている場合は、OS のインストール先ボリュームをブートデバイスとして設定する必要があります。

ストレージドライブを準備する際に使用できるオプションについては、次の各トピックで説明します:

- 63 ページの「Oracle System Assistant」
- 64 ページの「LSI WebBIOS 構成ユーティリティー」

Oracle System Assistant

Oracle System Assistant は、オペレーティングシステムのインストール用ディスクを準備するためのもっとも簡単な方法です。次の表に、Oracle System Assistant が HBA を参照するために使用する名前と、Oracle System Assistant によるサポートの内容を示します。

Oracle System Assistant 名	Oracle System Assistant でのサポート
Sun Storage 6 Gb SAS PCIe RAID HBA	<ul style="list-style-type: none"> ■ 1 台以上のハードドライブによる RAID 0、および 2 台以上のハードドライブによる RAID 1 をサポートします ■ ボリュームをブートデバイスとして設定できます ■ ボリュームがブートデバイスかどうかを表示できます ■ ディスクの状態(良、不良、ホットスペア)を表示できます

Oracle System Assistant でストレージドライブを準備するための手順については、65 ページの「ストレージドライブを準備する (Oracle System Assistant)」を参照してください。

LSI WebBIOS 構成ユーティリティ

LSI WebBIOS 構成ユーティリティは HBA ファームウェアに組み込まれています。

LSI WebBIOS 構成ユーティリティを使用してストレージドライブを準備するのは、次のような場合です:

- サーバーに Oracle System Assistant がインストールされていないか、Oracle System Assistant を使いたくない。
- OS のインストール先ディスクを使用して RAID ボリュームレベル 5、6、10、50、60 を作成したい (Oracle System Assistant は、SAS6-R-REM-Z については、RAID 0 および 1 のみをサポート)。

LSI WebBIOS 構成ユーティリティを使用して OS インストール用ストレージドライブを準備するための大まかな手順を次に示します:

1. 1 台以上の RAID ボリューム (仮想ドライブ) を作成します。
『MegaRAID SAS Software User's Guide』 (Web ページ上のリンクはソフトウェアユーザーガイド) を参照してください。このドキュメントは次で入手できます:
http://www.lsi.com/sep/Pages/oracle/sg_x_sas6-r-rem-z.aspx
2. 2 つ以上の仮想ドライブを作成する場合は、1 つの仮想ドライブをブートボリュームとして選択します。67 ページの「仮想ドライブをブート可能にする (LSI WebBIOS ユーティリティ)」を参照してください。
MegaRAID SAS ソフトウェアユーザーガイドには、ドライブをブート可能にするための手順は含まれていません。

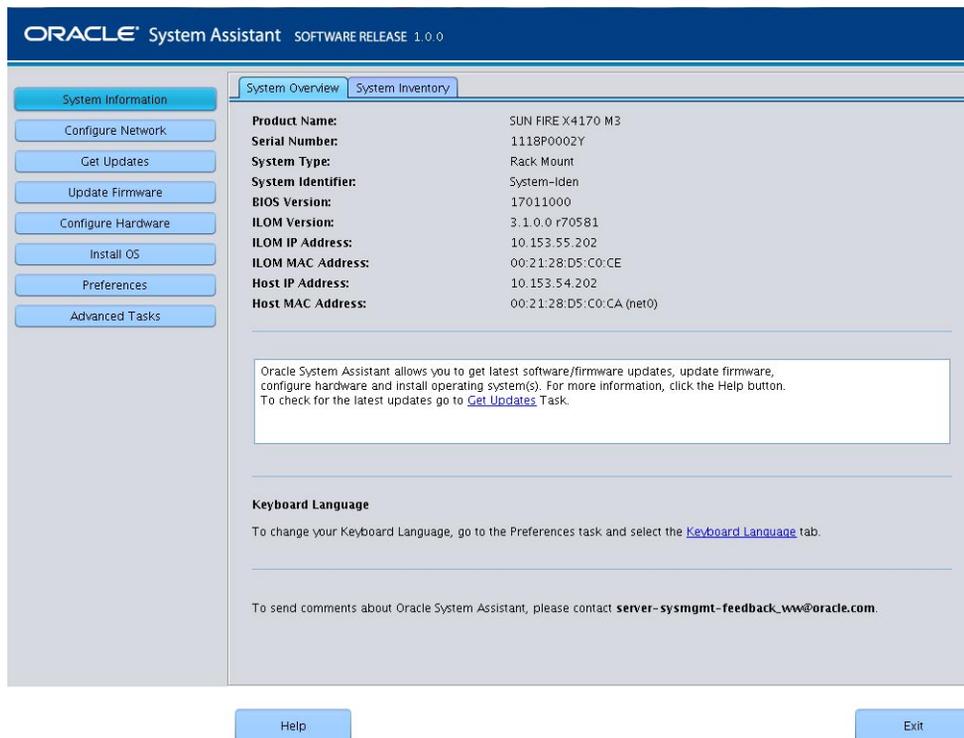
▼ ストレージドライブを準備する (Oracle System Assistant)

Oracle System Assistant RAID 構成タスクを実行することによって、OS インストール用のハードドライブを準備できます。このタスクにより、SGXSAS6INTZ の場合は RAID 0、SG-SAS6-R-REM-Z の場合は RAID 0 または 1 を使用してブート可能なボリュームを作成できます。

- 始める前に
- インストール方法を設定します:
 - Oracle System Assistant をローカルで実行するための配線方法の詳細は、[25 ページの「サーバーモジュールの配線」](#)を参照してください。
 - ILOM リモートコンソールの設定方法の詳細は、[47 ページの「Oracle ILOM 経由のサーバーモジュールコンソールへのアクセス」](#)を参照してください。
 - サポートされている HBA については、[61 ページの「サポートされているホストバスアダプタ」](#)を参照してください。
- 1 サーバーがスタンバイ電源モードになっていることを確認します。
 - 2 サーバーをブートし、モニターまたはリモートコンソール画面を注視して、**F9** キーを押して **Oracle System Assistant** を起動するように求めるプロンプトが表示されるのを待ちます。

```
Version 2.14.1219. Copyright (C) 2011 American Megatrends, Inc.
BIOS Date: 09/06/2011 12:12:06 Ver: 20011300
Press F2 to run Setup (CTRL+E on serial keyboard)
Press F8 for BBS Popup (CTRL+P on serial keyboard)
Press F12 for network boot (CTRL+N on serial keyboard)
Press F9 to start Oracle System Assistant
```

- 3 プロンプトが表示されたら **F9** キーを押します。
「Oracle System Assistant System Overview」画面が表示されます。



- 4 「**Configure Hardware**」をクリックします。
「Configure Hardware RAID Configuration」画面が表示されます。
- 5 「**HBA**」ドロップダウンリストから、特定のホストバスアダプタ (**HBA**) を選択します。
Sun Blade X3-2B では、次のストレージドライブコントローラをサポートしています:
- SG-SAS6-REM-Z
 - SG-SAS6-R-REM-Z
- サポートされている HBA の詳細は、61 ページの「サポートされているホストバスアダプタ」を参照してください。
- 6 **RAID** レベルを選択します。
Oracle System Assistant は、RAID 0 と RAID 1 のみをサポートしています。

- 7 「Available Disks」セクションに表示されたリストから、ボリュームに含めるディスクを選択します。
- 8 「Create Volume」をクリックします。
作成されたボリュームが「Created Volumes」セクションのリストに表示されます。
- 9 「Volume Details」をクリックします。
ボリュームの名前を入力します。
- 10 SG-SAS6-R-REM-Z HBA (Sun Storage 6 Gb SAS PCIe RAID HBA) の場合は、ボリュームをブート可能として設定します。
 - 「Created Volumes」セクションで、今作成したボリュームを選択します。
 - 「Set Volume for Boot」をクリックします。

注-SG-SAS6-REM-Z HBA の場合は、ブートディスクを設定する必要はありません。システム BIOS によって自動的にブート可能なディスクとして認識されます。

- 次の手順 次のうち、使用している OS のインストールガイドに示された手順に従って OS をインストールします:
- 『Sun Blade X3-2B (旧 Sun Blade X6270 M3) ESX ソフトウェアインストールガイド』
 - 『Sun Blade X3-2B (旧 Sun Blade X6270 M3) Linux オペレーティングシステムインストールガイド』
 - 『Sun Blade X3-2B (旧 Sun Blade X6270 M3) Oracle Solaris オペレーティングシステムインストールガイド』
 - 『Sun Blade X3-2B (旧 Sun Blade X6270 M3) Oracle VM サーバーインストールガイド』
 - 『Sun Blade X3-2B (旧 Sun Blade X6270 M3) Windows オペレーティングシステムインストールガイド』

▼ 仮想ドライブをブート可能にする (LSI WebBIOS ユーティリティ)

LSI BIOS 構成ユーティリティを使用して、SG-SAS6-R-REM-Z HBA 上に 2 台以上の仮想ドライブ (RAID ボリューム) を作成した場合は、次の手順に従って 1 つの仮想ドライブをブート可能にします。

次のいずれかに該当する場合は、この手順を実行する必要はありません:

- Oracle System Assistant を使用してボリュームを作成し、ボリュームをブート可能にした場合。
- SG-SAS6-REM-Z HBA が取り付けられている場合。
- LSI BIOS 構成ユーティリティを使用して仮想ドライブを1つだけ作成した場合。

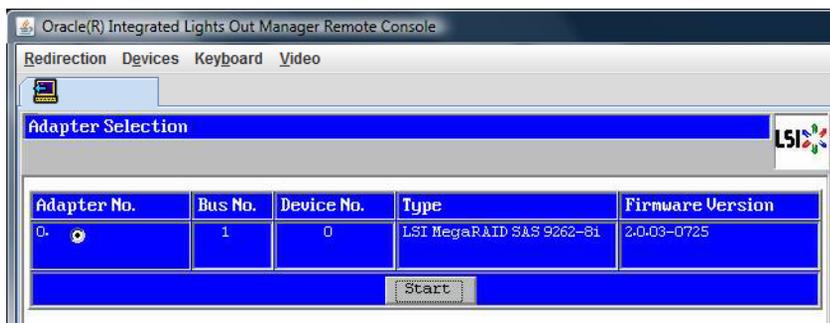
始める前に LSI BIOS 構成ユーティリティを使用して SG-SAS6-R-REM-Z HBA 上に最低1つの仮想ドライブを作成します。

- 1 サーバーがスタンバイ電源モードになっていることを確認します。
- 2 LSI SG-SAS6-R-REM-Z HBA BIOS の WebBIOS メインメニューにアクセスします。

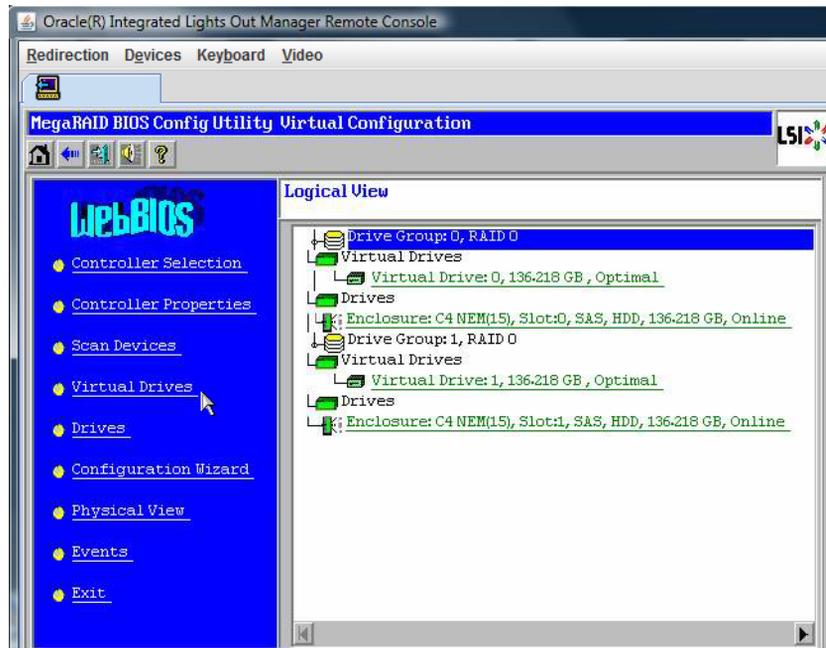
注-仮想ドライブを作成した直後であれば、すでに WebBIOS 画面が表示されています。WebBIOS ユーティリティを終了してしまった場合は、手順2と手順3を実行すると WebBIOS メインメニューが開きます。

- システム BIOS がレガシーモードで実行されている場合:
 - a. システムをブートし、画面に表示されるメッセージを注視して、LSI バナーが表示されるまで待ちます。
 - b. バナーページでプロンプトが表示されたら、**Control+H** キーを押します。
 - システム BIOS が UEFI モードで実行されている場合は、システム BIOS 設定ユーティリティ経由で LSI BIOS にアクセスします。
- 詳細は、『Sun Blade X3-2B (旧 Sun Blade X6270 M3) 管理ガイド』を参照してください。

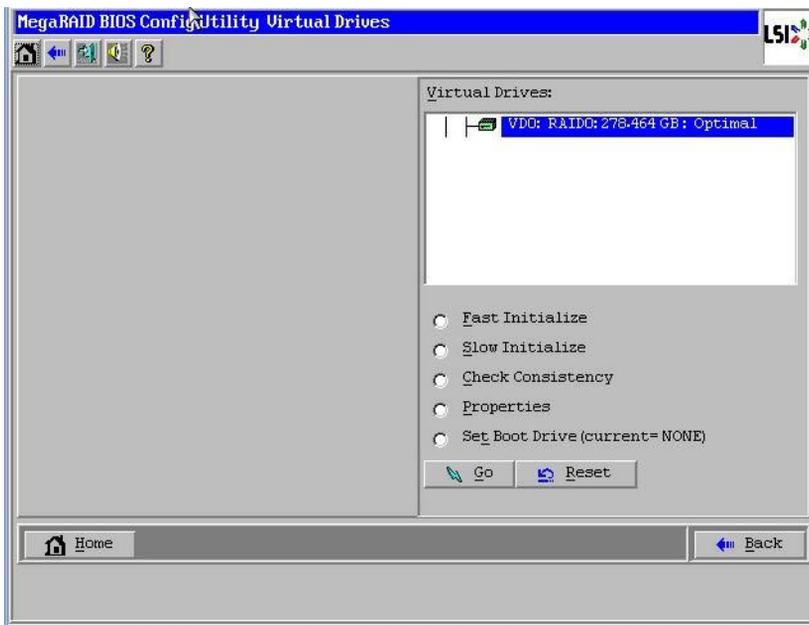
「Adapter Selection」画面が表示されます。



- 3 「Adapter Selection」画面で「Start」をクリックします。
「MegaRAID BIOS Config Utility Virtual Configuration」画面が表示されます。



- 4 「Virtual Drives」をクリックします。
「Virtual Drives」画面が表示されます。



- 5 ブート可能にする仮想ドライブを選択します。
- 6 「Set Boot Drive」をクリックして「Go」をクリックします。

操作が正常に終了すると、この仮想ドライブの「Set Boot Drive」値 (current= 選択した仮想ドライブ) が表示されます。

次の手順 次のうち、使用している OS のインストールガイドに示された手順に従って OS をインストールします:

- 『Sun Blade X3-2B (旧 Sun Blade X6270 M3) ESX ソフトウェアインストールガイド』
- 『Sun Blade X3-2B (旧 Sun Blade X6270 M3) Linux オペレーティングシステムインストールガイド』
- 『Sun Blade X3-2B (旧 Sun Blade X6270 M3) Oracle Solaris オペレーティングシステムインストールガイド』
- 『Sun Blade X3-2B (旧 Sun Blade X6270 M3) Oracle VM サーバーインストールガイド』
- 『Sun Blade X3-2B (旧 Sun Blade X6270 M3) Windows オペレーティングシステムインストールガイド』

インストール済み Oracle Solaris OS の構成

サーバーモジュール用にオプションのインストール済み Oracle Solaris OS イメージを購入した場合は、インストール済みの Solaris OS を構成することによってインストールを完了させます。Solaris OS イメージには、使用しているサーバーモデルに必要なドライバがすべて組み込まれています。

注-インストール済み Oracle オペレーティングシステムの使用可能なバージョンについては、『[Sun Blade X3-2B \(旧 Sun Blade X6270 M3\) プロダクトノート](#)』のサポートされているオペレーティングシステムのセクションを参照してください。

次の表に、インストール済み Oracle Solaris OS を構成するために必要なタスクを示します。

手順	タスク	リンク
1	Solaris OS のドキュメントを確認します。	71 ページの「Oracle Solaris OS のドキュメント」
2	使用しているサーバー環境の構成ワークシートに記入します。	72 ページの「構成ワークシート」
3	インストール済み Oracle Solaris を構成します。	74 ページの「インストール済み Oracle Solaris 11 を構成する」

Oracle Solaris OS のドキュメント

Oracle Solaris オペレーティングシステムの使用方法については、次を参照してください: <http://www.oracle.com/technetwork/server-storage/solaris11/documentation/index.html>

構成ワークシート

次の情報を収集し、構成作業を開始するための準備を整えます。自分の組織とネットワーク環境に当てはまる情報だけを収集すれば十分です。

必要なインストール情報	説明	回答:アスタリスク(*)はデフォルト
言語	OS で使用可能な言語のリストから選択します。	英語*
ロケール	使用可能なロケールのリストから地理的地域を選択します。	英語 (C-7ビット ASCII)*
端末	使用可能な端末タイプのリストから、使用している端末のタイプを選択します。	
ネットワーク接続	システムはネットワークに接続されていますか?	<ul style="list-style-type: none"> ■ ネットワークに接続されている ■ ネットワークに接続されていない*
DHCP	ネットワークインタフェースの構成に、動的ホスト構成プロトコル (DHCP) を使用できますか?	<ul style="list-style-type: none"> ■ はい ■ いいえ*
DHCP を使用しない場合は、ネットワーク情報を指定します	システムの静的 IP アドレスを指定します。 例: 129.200.9.1	
	サブネットのネットマスクを指定します。 例: 255.255.0.0	255.255.0.0*
	このマシンで IPv6 を有効にしますか?	<ul style="list-style-type: none"> ■ はい ■ いいえ*
ホスト名	システムのホスト名を選択します。	
Kerberos	このマシンで Kerberos セキュリティーを構成しますか?有効にする場合、次の情報を収集します: <ul style="list-style-type: none"> ■ デフォルトレルム ■ 管理サーバー ■ 第 1 KDC ■ 追加の KDC (オプション) 	<ul style="list-style-type: none"> ■ はい ■ いいえ*

必要なインストール情報	説明	回答:アスタリスク(*)はデフォルト
ネームサービス	該当する場合は、このシステムで使うネームサービスを指定してください。	<ul style="list-style-type: none"> ■ NIS+ ■ NIS ■ DNS ■ LDAP ■ なし*
システムが属するドメインの名前を指定します。		
NIS+ または NIS を選択した場合、ネームサーバーを指定しますか? それとも、インストールプログラムに自動検出させますか?		<ul style="list-style-type: none"> ■ 指定する ■ 自動検出する*
DNS を選択した場合、DNS サーバーの IP アドレスを指定します。少なくとも 1 つ以上の IP アドレスを入力する必要があります。最大で 3 つのアドレスを入力できます。		
また、DNS クエリーを行う際に検索するドメインのリストを指定することもできます。		
検索ドメイン:		
検索ドメイン:		
検索ドメイン:		
LDAP を選択した場合、LDAP プロファイルに関する次の情報を入力します:		
<ul style="list-style-type: none"> ■ プロファイル名 ■ プロファイルサーバー 		
LDAP プロファイルにプロキシ認証レベルを指定する場合、次の情報を収集します:		
<ul style="list-style-type: none"> ■ プロキシバインド識別名 ■ プロキシバインドパスワード 		

必要なインストール情報	説明	回答:アスタリスク(*)はデフォルト
デフォルトルート	<p>デフォルトルート IP アドレスを指定しますか?それとも、OS インストールプログラムに自動検出させますか?</p> <p>デフォルトルートは、2つの物理ネットワーク間でトラフィックを転送するブリッジを提供します。次のいずれかを選択します:</p> <ul style="list-style-type: none"> IP アドレスを指定します。指定された IP アドレスを使用して、<code>/etc/defaultrouter</code> ファイルが作成されます。システムのリブート時に、指定した IP アドレスがデフォルトルートになります。 OS インストールプログラムに IP アドレスを自動検出させます。ただし、その場合は、システムがルーターのあるサブネット上に存在していなければなりません。このルーターは、ルーター発見用にインターネット制御メッセージプロトコル (Internet Control Message Protocol, ICMP) を使用して自身を通知します。コマンド行インタフェースを使用する場合は、システムのブート時に IP アドレスが自動的に検出されます。 ルーターを使用していないか、現時点ではソフトウェアに IP アドレスを検出させたくない場合には、「None」を選択します。ソフトウェアは、リブート時に IP アドレスを自動的に検出しようとしません。 	<ul style="list-style-type: none"> 指定する 検出する なし*
タイムゾーン	デフォルトのタイムゾーンを指定する方法を指定します。	<ul style="list-style-type: none"> 地理的地域* GM からの時差 タイムゾーンファイル
root パスワード	システムの root パスワードを選択します。	

次の手順

74 ページの「インストール済み Oracle Solaris 11 を構成する」

▼ インストール済み Oracle Solaris 11 を構成する

始める前に OS を構成するために必要な組織およびネットワーク環境情報を収集します。
72 ページの「構成ワークシート」を参照してください。

- 1 Oracle ILOM にログインしていない場合は、直接シリアル接続を介してローカルにログインするか、Ethernet 接続を介してリモートからログインします。
43 ページの「サーバーモジュール SP Oracle ILOM へのログイン」を参照してください。
- 2 サーバーの電源を投入するか、再起動します:
 - サーバーの電源を投入するには、次のいずれかの方法を使用します:
 - Oracle ILOM Web インタフェースで、「Host Management」 > 「Power Control」をクリックし、メニューで「Power On」を選択します。
 - Oracle ILOM CLI で、ILOM プロンプトに次のコマンドを入力します:
-> **start /System**
次のプロンプトが表示されたら、「y」と入力して確定します:
Are you sure you want to start /SYS (y/n)? y
Starting /System
 - サーバーを再起動するには、次のいずれかを実行します:
 - Oracle ILOM Web インタフェースで、「Host Management」 > 「Power Control」をクリックし、メニューから「Reset」を選択します。
Oracle ILOM コンソール Web インタフェースに接続する方法の詳細は、48 ページの「リモートコンソールを使用してサーバーモジュールに接続する」を参照してください。
 - Oracle ILOM CLI で、Oracle ILOM プロンプトに次のコマンドを入力します:
-> **reset /System**
次のプロンプトが表示されたら、「y」と入力して確定します:
Are you sure you want to reset /System (y/n)? y
Performing hard reset on /System
サーバーモジュールがホストのブートプロセスを開始します。
Oracle ILOM コンソール CLI に接続する方法の詳細は、48 ページの「サーバーモジュールシリアルコンソールに接続する (CLI)」を参照してください。
- 3 Oracle ILOM で、次のいずれかの方法を使用してホストコンソールを起動します:
 - Oracle ILOM Web インタフェースで、「Remote Control」 > 「Launch Remote Console」をクリックします。
サーバーがブートし、「GRUB」メニューが表示されます。

- Oracle ILOM CLI で次のように入力します:

-> **start /HOST/console**

次のプロンプトが表示されたら、「y」と入力して確定します:

```
Are you sure you want to start /HOST/console (y/n)? y
Serial console started.
```

サーバーがブートし、「GRUB」メニューが表示されます。

注- 10 秒以内に何かキーを押さないと、デフォルトの選択(シリアルポート)が使用されます。上下の矢印キーを押すと、「GRUB」メニューで一時停止します。

```
GNU GRUB Version 0.97 (607K lower / 2087168K)
Oracle Solaris 11 11/11 X86 - Serial Port (ttya)
Oracle Solaris 11 11/11 X86 - Graphics Adapter
```

- 4 「GRUB」メニューで、上下の矢印キーを使用して表示オプションを選択し、Enter キーを押します。

表示の出力先を引き続きシリアルポートにするのか、ビデオポートに接続されたデバイスに切り替えるのかを選択できます。

- 出力をシリアルポートに表示するには:

Oracle Solaris 11 11/11 X86 - Serial Port (tty)

- 出力をビデオポートに表示するには:

Oracle Solaris 11 11/11 X86 - Graphics Adapter

注- 表示をビデオポートに出力することを選択した場合、VGA ディスプレイと入力デバイス (USB キーボードおよびマウス) を、サーバーモジュールの UCP ポートに接続されたマルチポート (ドングル) ケーブルに接続する必要があります。デバイスをサーバーに接続する方法については、[25 ページの「サーバーモジュールの配線」](#)を参照してください。

- 5 Oracle Solaris 11 インストーラの画面上のプロンプトに従って、先に収集した組織およびネットワークの情報を使用してソフトウェアを構成します。

サーバーへのネットワーク情報の割り当てに選択した方法 (DHCP または静的 IP アドレス) によって、表示される画面が異なります。

- 6 インストールが完了したら、次のいずれかの方法を使用してコンソールセッションを終了します:

- Oracle ILOM Web インタフェースで「Remote Console」ウィンドウを閉じて、Oracle ILOM からログアウトします。

- Oracle ILOM CLI で、Esc キーの後に "(" キー (Shift + 9) を押して、Oracle ILOM からログアウトします。

参考 関連情報

- [71 ページの「Oracle Solaris OS のドキュメント」](#)
- [72 ページの「構成ワークシート」](#)

インストール済み Oracle VM ソフトウェアの構成

サーバーモジュール上にインストール済みのオプションの Oracle VM ソフトウェアイメージを購入した場合は、インストール済みのソフトウェアを構成することによってインストールを完了させます。このインストール済みソフトウェアイメージには、サーバーモジュールに必要なすべてのドライバが含まれています。

注-Oracle インストール済みオペレーティングシステムの使用可能なバージョンについては、『[Sun Blade X3-2B \(旧 Sun Blade X6270 M3\) プロダクトノート](#)』のサポートされているオペレーティングシステムのセクションを参照してください。

次の表に、インストール済み Oracle VM を構成するために必要なタスクを示します。

手順	タスク	リンク
1	使用しているサーバー環境に合わせて Oracle VM Server 構成ワークシートに記入します。	79 ページの「Oracle VM Server 構成ワークシート」
2	インストール済み Oracle VM ソフトウェアを構成します。	80 ページの「インストール済み Oracle VM Server を構成する」
3	Oracle VM ソフトウェアを更新します。	83 ページの「Oracle VM ソフトウェアのアップグレード」
4	Oracle VM オペレーティングシステムを使用します。	84 ページの「Oracle VM 入門」

Oracle VM Server 構成ワークシート

次の情報を収集し、構成作業を開始するための準備を整えます。自分の組織とネットワーク環境に当てはまる情報だけを収集すれば十分です。

必要なインストール情報	説明	回答
Oracle VM Server のパスワード	<ul style="list-style-type: none"> ■ root パスワードを選択します。文字の種類や長さに制限はありません。 ■ Oracle VM エージェントのパスワードを選択します。パスワードは6文字以上でなければなりません。 	
ネットワークインタフェース	サーバーを管理するために使用するインタフェースを指定します。	
ネットワーク構成	<p>サーバーの IP アドレスを指定します。静的 IP アドレスでなければなりません。</p> <p>例: 172.16.9.1</p> <hr/> <p>サーバーがサブネットに属している場合、そのサブネットのネットマスクを指定します。</p> <p>例: 255.255.0.0</p> <hr/> <p>サーバーにゲートウェイを介してアクセスする場合は、ゲートウェイの IP アドレスを指定します。</p> <hr/> <p>ドメイン名サーバー (DNS) の IP アドレスを指定します。(ちょうど)1つの DNS が必要です。</p>	
ホスト名	<p>サーバーの完全修飾ドメイン名を指定します。</p> <p>例: ホスト名.oracle.com</p>	

関連情報

- [80 ページの「インストール済み Oracle VM Server を構成する」](#)

▼ インストール済み Oracle VM Server を構成する

次の手順では、サーバーモジュールにインストール済みの Oracle VM Server だけを構成する方法を示します。Oracle VM には、Oracle VM Manager などほかのコンポーネントもありますが、これらは仮想マシン環境をサポートするためにインストールされているかすでに稼働していなければなりません。

始める前に ソフトウェアを構成するために必要な組織およびネットワーク環境情報を収集します。79 ページの「Oracle VM Server 構成ワークシート」を参照してください。

- 1 サーバーモジュールの **Oracle ILOM** にログインしていない場合は、直接シリアル接続を介してローカルでログインするか、**Ethernet** 接続を介してリモートでログインします。

43 ページの「サーバーモジュール SP Oracle ILOM へのログイン」を参照してください。

- 2 **Oracle ILOM** で、次のいずれかの方法を使用してホストコンソールを起動します:

- **Oracle ILOM Web** インタフェースで、「**Remote Control**」 > 「**Launch Remote Console**」をクリックします。

サーバーがブートし、「GRUB」メニューが表示されます。

Oracle ILOM コンソール Web インタフェースに接続する方法の詳細は、48 ページの「リモートコンソールを使用してサーバーモジュールに接続する」を参照してください。

- **Oracle ILOM CLI** で次のように入力します:

```
-> start /HOST/console
```

次のプロンプトが表示されたら、「y」と入力して確定します:

```
Are you sure you want to start /HOST/console (y/n)? y  
Serial console started.
```

サーバーがブートし、「GRUB」メニューが表示されます。

Oracle ILOM コンソール CLI に接続する方法の詳細は、48 ページの「サーバーモジュールシリアルコンソールに接続する (CLI)」を参照してください。

注-5 秒以内に何かキーを押さないと、デフォルトの選択(シリアルポート)が使用されます。上下の矢印キーを押すと、このメニューで一時停止します。

- 3 次のようにして、サーバーの電源を投入するか、サーバーを再起動します:

- サーバーの電源を投入するには、次のいずれかを実行します:

- **Oracle ILOM Web** インタフェースで、「**Host Management**」 > 「**Power Control**」をクリックし、メニューで「**Power On**」をクリックします。

- **Oracle ILOM CLI** で次のように入力します:

```
-> start /System
```

次のプロンプトが表示されたら、「y」と入力して確定します:

```
Are you sure you want to start /SYS (y/n)? y
```

```
Starting /System
```

- サーバーを再起動するには、次のいずれかを実行します:
 - Oracle ILOM Web インタフェースで、「Host Management」 > 「Power Control」をクリックし、メニューから「Reset」を選択します。
 - ILOM CLI で次のように入力します:

```
-> reset /System
```

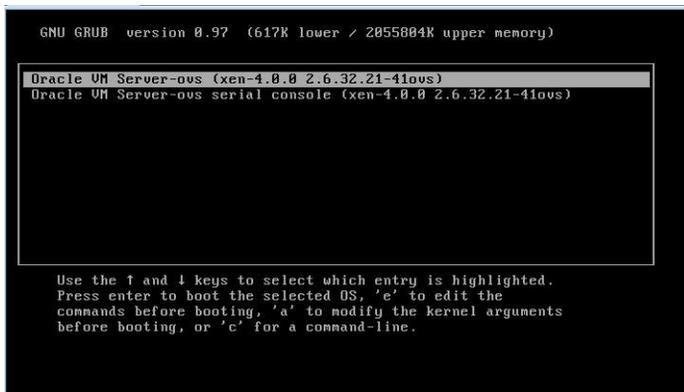
次のプロンプトが表示されたら、「y」と入力して確定します:

```
Are you sure you want to reset /System (y/n)? y
```

```
Performing hard reset on /System
```

サーバーモジュールがホストのブートプロセスを開始します。サーバーがブートし、「GRUB」メニューが表示されます。

注-5秒以内に何かキーを押さないと、「GRUB」メニューが画面から消え、表示はデフォルトでシリアルポートに送信されます。「GRUB」メニューで一時停止するには、Enter 以外の任意のキーを押します。次に、使用するオプションを選択し、Enter キーを押して続行します。



```
GNU GRUB version 0.97 (617K lower / 2055804K upper memory)

Oracle VM Server-ovs (xen-4.0.0 2.6.32.21-41ovs)
Oracle VM Server-ovs serial console (xen-4.0.0 2.6.32.21-41ovs)

Use the ↑ and ↓ keys to select which entry is highlighted.
Press enter to boot the selected OS, 'e' to edit the
commands before booting, 'a' to modify the kernel arguments
before booting, or 'c' for a command-line.
```

- 4 「GRUB」メニューで、上下の矢印キーを使用して表示オプションを選択し、Enter キーを押します。
 - 出力をビデオポートに表示するには、次に示すリストの最初のオプションを選択し、Enter キーを押します:

```
Oracle VM Server - ovs (xen-4.0.0 2.6.32.32-41ovs)
```
 - 出力をシリアルポートに表示するには、リストの2番目のオプションを選択し、Enter キーを押します:

Oracle VM Server - ovs serial console (xen-4.0.0
2.6.32.21-41ovs)

注-表示をビデオポートに出力することを選択した場合、VGA ディスプレイと入力デバイス (USB キーボードおよびマウス) を、サーバーモジュールの UCP ポートに接続されたマルチポート (ドングル) ケーブルに接続する必要があります。デバイスをサーバーに接続する方法の詳細は、31 ページの「Oracle ILOM への接続」を参照してください。

- 5 Oracle VM インストーラの画面上のプロンプトに従って、先に収集した組織およびネットワークの情報を使用してソフトウェアを構成します。
- 6 インストールが完了したら、次のいずれかの方法を使用してコンソールセッションを終了します:
 - Oracle ILOM Web インタフェースで「Remote Console」ウィンドウを閉じて、Oracle ILOM からログアウトします。
 - Oracle ILOM CLI で、Esc キーの後に "(" キー (Shift + 9) を押してシリアルリダイレクトセッションを終了し、Oracle ILOM からログアウトします。
- 7 必要に応じて、Oracle VM ソフトウェアを更新します。
83 ページの「Oracle VM ソフトウェアのアップグレード」を参照してください。

参考 関連情報

- Oracle VM Server ソフトウェアの取得。次に移動します:
<http://edelivery.oracle.com/linux>
- Oracle VM テンプレートの取得。次に移動します:
<http://www.oracle.com/technetwork/server-storage/vm/templates-101937.html>

Oracle VM ソフトウェアのアップグレード

システムにインストール済みの Oracle VM Server ソフトウェアを使用する場合は、Oracle VM インフラストラクチャーの管理に使用する Oracle VM Manager のバージョンと互換性があることを確認する必要があります。互換性を確保する必要がある場合は、使用している Oracle VM Server または Oracle VM Manager をアップグレードして、両者のバージョンを一致させてください。

Oracle VM ソフトウェアのアップグレードに関する情報については、Oracle VM のドキュメントを参照してください。Oracle VM のドキュメントは次で入手できます:
<http://www.oracle.com/technetwork/documentation/vm-096300.html>

Oracle VM 入門

Oracle VM の使用方法の完全な情報については、次の場所で入手できる Oracle VM のドキュメントを参照してください:

<http://www.oracle.com/technetwork/documentation/vm-096300.html>

次に、Oracle VM 環境の設定に関するヒントをいくつか示します:

- Oracle Solaris と Oracle Linux の 2 つの VM が、インストール済みソフトウェアの構成プロセスの一部としてサーバーにインストールされます。
 - Oracle Linux VM のデフォルト root パスワードは `ovsroot` です。
Oracle Solaris VM の root パスワードは、Oracle Solaris のインストール手順の一部として構成します。
 - 両方の VM のデフォルトコンソールパスワードは `oracle` です。
- サーバーを既存のサーバープールに追加するか、新しいサーバープールを作成します。

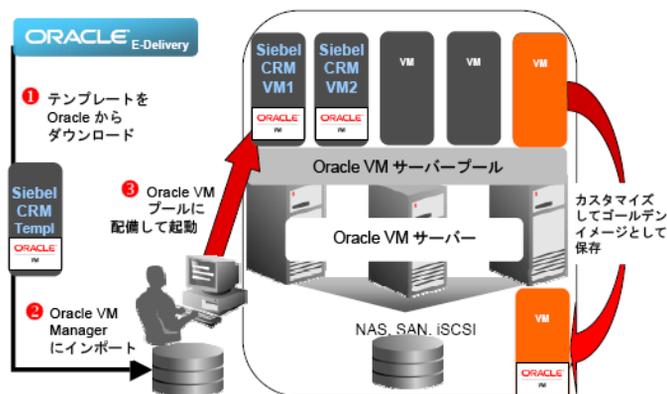
典型的な Oracle VM 配備では、複数の Oracle VM Server がサーバープールにグループ化されます。すべてのサーバーが外部共有ストレージに対するアクセス権を保有しています。Oracle VM Server ソフトウェアがインストール済みになっていると、プール内のサーバーを共有ストレージに迅速に配置できます。

Oracle VM 3.0 のストレージとサーバープールに関する詳細は、次にある Oracle VM のドキュメントを参照してください:

<http://www.oracle.com/technetwork/documentation/vm-096300.html>

- ゲスト VM 用の適切な Oracle VM テンプレートをダウンロードおよびインストールします。

Oracle では、ビルド、構成、およびパッチ済みのゲスト仮想マシン (アプリケーションによっては複数の仮想マシン) を簡単に配備することができるテンプレートを用意しています。これらのテンプレートは、Oracle からダウンロードして、Oracle VM Manager を介して配備します。



テンプレートには、Siebel CRM や Oracle Database などの完全な Oracle ソフトウェアソリューション (オペレーティングシステム (Oracle Enterprise Linux) および内部開発またはサードパーティー製のソフトウェアを含む) を含めることができます。テンプレートは、個々の環境に合わせてカスタマイズすることもできます。詳細については、次にアクセスしてください:

<http://www.oracle.com/technetwork/server-storage/vm/templates-101937.html>

関連情報

- 79 ページの「Oracle VM Server 構成ワークシート」
- 80 ページの「インストール済み Oracle VM Server を構成する」

インストールに関する問題のトラブルシューティング

このセクションでは、インストールに関する問題のトラブルシューティング方法について説明します。

次の表に、サーバーのトラブルシューティングに関するタスクを示します。

タスク	リンク
サーバーの電源を切断して正常に停止します。	87 ページの「サーバーの電源切断による正常な停止」
サーバーの電源を切断して緊急停止します。	89 ページの「電源の切断による即時停止」
注- 上記のいずれかの手順に従ってサーバーモジュールをシャットダウンした場合、保存していないデータは失われます。	
サーバーをリセットします。	91 ページの「サーバーのリセット」
サーバーの障害を特定します。	92 ページの「サーバーの障害の特定」
サーバーの電源状態をトラブルシューティングします。	93 ページの「サーバーの電源状態のトラブルシューティング」
サーバーの情報を記録してから保守部門に連絡します。	94 ページの「技術サポート情報ワークシート」
システムのシリアル番号の場所を確認してから保守部門に連絡します。	94 ページの「システムのシリアル番号の確認」

サーバーの電源切断による正常な停止

サーバーを正常に停止するには、次のいずれかのセクションの手順を実行します。これらの手順を実行すると、ACPI 対応の OS では、オペレーティングシステムが正常に停止されます。ACPI 対応の OS を実行していないサーバーは、シャットダウン後即座にスタンバイ電源モードに移行します。

- [88 ページの「電源ボタンを使用して正常に停止する」](#)
- [88 ページの「Oracle ILOM CLI を使用して正常に停止する」](#)
- [88 ページの「Oracle ILOM Web インタフェースを使用して正常に停止する」](#)

▼ 電源ボタンを使用して正常に停止する

- サーバーモジュールのフロントパネルにある電源ボタンを押してから放します。

注-サーバーの電源を完全に切断するには、サーバーモジュールをシャーシから取り外す必要があります。

参考 関連情報

- 91 ページの「サーバーのリセット」
- 93 ページの「サーバーの電源状態のトラブルシューティング」
- 94 ページの「技術サポート情報ワークシート」

▼ Oracle ILOM CLI を使用して正常に停止する

- 1 サーバーモジュール SP または CMM の Oracle ILOM CLI にログインします。
- 2 システムを正常に停止するには、次のいずれかのコマンドを使用します:
 - サーバーモジュールの SP CLI で次のように入力します:
stop /System
 - CMM CLI で次のように入力します:
stop /CH/BL n/System
ここで、*n* は、ブレードが取り付けられているシャーシのロットです。

参考 関連情報

- 91 ページの「サーバーのリセット」
- 93 ページの「サーバーの電源状態のトラブルシューティング」
- 94 ページの「技術サポート情報ワークシート」
- 94 ページの「システムのシリアル番号の確認」

▼ Oracle ILOM Web インタフェースを使用して正常に停止する

- 1 サーバーモジュール SP または CMM の Oracle ILOM Web インタフェースにログインします。

- 2 「Host Management」 > 「Power Control」 をクリックします。
「Power Control」 ページが表示されます。
- 3 システムを正常に停止するには、次のいずれかのコマンドを使用します:
 - サーバーモジュール SPWeb インタフェースの「Actions」メニューから「Graceful Shutdown and Power Off」を選択します。
 - CMM Web インタフェースで、「/CH/BLn/System」の横にあるラジオボタンをクリックし、「Actions」リストから「Graceful Shutdown and Power Off」を選択します。
ここで、*n*は、ブレードが取り付けられているシャーシのロットです。

参考 関連情報

- 91 ページの「サーバーのリセット」
- 93 ページの「サーバーの電源状態のトラブルシューティング」
- 94 ページの「技術サポート情報ワークシート」

電源の切断による即時停止

サーバーを緊急停止するには、次のいずれかのセクションの手順を実行します。この停止方法を実行すると、サーバー上の保存されていないデータが失われます。

- 89 ページの「電源ボタンを使用して即時停止する」
- 90 ページの「Oracle ILOM CLI を使用して即時停止する」
- 90 ページの「Oracle ILOM Web インタフェースを使用して即時停止する」

▼ 電源ボタンを使用して即時停止する



注意- 即時停止を実行すると、サーバー上の保存されていないデータが失われます。

- 電源ボタンを5秒間押し続けると、主電源が切れてスタンバイ電源モードに移行します。

注- サーバーの電源を完全に切断するには、サーバーモジュールをシャーシから取り外す必要があります。

参考 関連情報

- 91 ページの「サーバーのリセット」
- 93 ページの「サーバーの電源状態のトラブルシューティング」
- 94 ページの「技術サポート情報ワークシート」

▼ Oracle ILOM CLI を使用して即時停止する



注意-即時停止を実行すると、サーバー上の保存されていないデータが失われます。

- 1 サーバーモジュール SP または CMM の Oracle ILOM CLI にログインします。
- 2 システムを正常に停止するには、次のいずれかのコマンドを使用します:
 - サーバーモジュールの SP CLI で次のように入力します:
`stop -force /System`
 - CMM CLI で次のように入力します:
`stop -force /CH/BLn/System`
ここで、*n* は、ブレードが取り付けられているシャーシのロットです。

参考 関連情報

- 91 ページの「サーバーのリセット」
- 93 ページの「サーバーの電源状態のトラブルシューティング」
- 94 ページの「技術サポート情報ワークシート」
- 94 ページの「システムのシリアル番号の確認」

▼ Oracle ILOM Web インタフェースを使用して即時停止する



注意-即時停止を実行すると、サーバー上の保存されていないデータが失われます。

- 1 サーバーモジュール SP または CMM の Oracle ILOM Web インタフェースにログインします。

- 2 「Host Management」 > 「Power Control」 をクリックします。
「Remote Power Control」 ページが表示されます。
- 3 システムを正常に停止するには、次のいずれかのコマンドを使用します:
 - サーバーモジュール SPWeb インタフェースで、「Actions」リストから「Immediate Power Off」を選択します。
 - CMM Web インタフェースで、「/CH/BL n /System」の横にあるラジオボタンをクリックし、「Actions」リストから「Immediate Power Off」を選択します。
ここで、 n は、ブレードが取り付けられているシャーシの-slot です。

参考 関連情報

- 91 ページの「サーバーのリセット」
- 93 ページの「サーバーの電源状態のトラブルシューティング」
- 94 ページの「技術サポート情報ワークシート」

サーバーのリセット

サーバーを単にリセットする場合は、サーバーの電源を再投入する必要はありません。

次の各セクションでは、サーバーをリセットする方法の手順を示します。

- 91 ページの「Oracle ILOM CLI を使用してサーバーをリセットする」
- 92 ページの「Oracle ILOM Web インタフェースを使用してサーバーをリセットする」

▼ Oracle ILOM CLI を使用してサーバーをリセットする

- 1 サーバーモジュールまたは CMM の Oracle ILOM CLI にログインします。
- 2 システムを正常に停止するには、次のいずれかのコマンドを使用します:
 - サーバーモジュールの SP CLI で次のように入力します:
`reset /System`
 - CMM CLI で次のように入力します:
`reset /CH/BL n /System`

ここで、 n は、ブレードが取り付けられているシャーシのロットです。

参考 関連情報

- 93 ページの「サーバーの電源状態のトラブルシューティング」
- 94 ページの「技術サポート情報ワークシート」

▼ Oracle ILOM Web インタフェースを使用してサーバーをリセットする

- 1 サーバーモジュール SP または CMM の Oracle ILOM Web インタフェースにログインします。
- 2 「Host Management」 > 「Power Control」 をクリックします。
「Power Control」 ページが表示されます。
- 3 システムを正常に停止するには、次のいずれかのコマンドを使用します：
 - サーバーモジュール SP Web インタフェースで、「Actions」メニューから「Reset」を選択します。
 - CMM Web インタフェースで、「/CH/BL n 」の横にあるラジオボタンをクリックし、「Actions」リストから「Reset」を選択します。
ここで、 n は、ブレードが取り付けられているシャーシのロットです。

参考 関連情報

- 93 ページの「サーバーの電源状態のトラブルシューティング」
- 94 ページの「技術サポート情報ワークシート」
- 94 ページの「システムのシリアル番号の確認」

サーバーの障害の特定

サーバーの電源投入時に「Service Action Required」LED が点灯する場合は、Oracle ILOM をチェックして、システム障害が発生していないか確認してください。

サーバーモジュールの障害の特定に関する詳細は、『[Sun Blade X3-2B \(旧 Sun Blade X6270 M3\) サービスマニュアル](#)』を参照してください。

サーバーの電源状態のトラブルシューティング

Sun Blade 6000 モジュラーシステムでは、サーバーモジュールの電源が投入されるたびに、サーバーモジュールが CMM に照会して、サーバーモジュールの電源投入に十分な電力が電源ユニット (PSU) から供給可能かどうかを確認します。

サーバーモジュールの電源投入に十分な電力が得られない場合、CMM はサーバーモジュールが主電源からの電力供給を受けるのを禁止します。この状態になると、サーバーモジュールのフロントパネルにある OK 電源 LED が、スタンバイ点滅したままになります。

この電源問題をトラブルシューティングするには、次のガイドラインに従って操作します:

- Oracle ILOM のイベントログメッセージを見て、サーバーモジュールに電源投入の権限があるかどうかを確認します。サーバーモジュールの電源投入に十分な電力がシャーシの PSU から得られない場合、イベントメッセージがログに記録されます。

Oracle ILOM イベントログ、または消費電力の監視については、Oracle Integrated Lights Out Manager (ILOM) 3.1 ドキュメントライブラリを参照してください。

- 現在設置されているすべてのシャーシコンポーネントの電源投入をサポートするのに十分な数の電源が、システムシャーシに設置されていることを確認します。シャーシコンポーネントの電源投入に必要な電源の数については、システムシャーシのドキュメントを参照してください。
- 電力損失を避けるため、電源に対するデフォルトの CMM 電源管理設定を Oracle ILOM で使用します。

電源管理の詳細は、Oracle ILOM 3.1 のドキュメントを参照してください。

注 - 電源投入の権限が得られた場合、サーバーモジュールのフロントパネルにある OK/電源 LED がスタンバイ点滅状態になります。

- 必要に応じて、サーバーモジュールに付属する起動診断ツールを実行する方法について、『Oracle x86 サーバー診断ガイド』を参照してください。

関連情報

- 87 ページの「サーバーの電源切断による正常な停止」
- 89 ページの「電源の切断による即時停止」
- 94 ページの「技術サポート情報ワークシート」
- 94 ページの「システムのシリアル番号の確認」

技術サポート情報ワークシート

このトピックのトラブルシューティングの手順を使用しても問題を解決できない場合は、次の表を使用して、サポート担当者に伝える必要がある情報を収集してください。

必要なシステム構成情報	お客様の情報
サービス契約番号	
システムモデル	
オペレーティングシステム	
システムのシリアル番号	
システムに接続されている周辺装置	
お客様の電子メールアドレスと電話番号、および代理の連絡先	
システムの設置場所の住所	
スーパーユーザーのパスワード	
問題のサマリーと、問題が発生したときに実行した操作内容	
IPアドレス	
サーバー名(システムのホスト名)	
ネットワークまたはインターネットのドメイン名	
プロキシサーバー構成	

システムのシリアル番号の確認

サーバーモジュールに対する Oacle 保証サポートが必要な場合は、シリアル番号が必要になります。シリアル番号は、サーバーモジュールのフロントパネルに貼付されているラベルに記載されています。



シャーシのシリアル番号も書きとめておきます。

注- サーバーモジュールおよびシャーシのシリアル番号は、Oracle ILOM CMM で表示することもできます。Oracle CMM ILOM の使用法の詳細は、[31 ページの「Oracle ILOM の概要」](#)を参照してください。

使用している製品のサポートおよび保証情報については、次を参照してください:

<http://support.oracle.com>

関連情報

- [21 ページの「追加コンポーネント」](#)

サーバーファームウェアとソフトウェアの入手

このセクションでは、サーバーのファームウェアとソフトウェアにアクセスするためのオプションについて説明します。

説明	リンク
ファームウェアとソフトウェアのアップデートについて説明します。	97 ページの「ファームウェアとソフトウェアのアップデート」
ファームウェアとソフトウェアを入手するためのオプションについて学習します。	98 ページの「ファームウェアおよびソフトウェア入手のオプション」
入手可能なファームウェアとソフトウェアのパッケージを示します。	98 ページの「入手可能なソフトウェアリリースパッケージ」
Oracle System Assistant、My Oracle Support、または物理メディアのリクエストによって、ファームウェアとソフトウェアのパッケージを入手します。	100 ページの「ファームウェアとソフトウェアの入手」
ファームウェアとソフトウェアのアップデートをインストールします。	104 ページの「アップデートのインストール」

ファームウェアとソフトウェアのアップデート

サーバー用のハードウェアドライバやツールなどのファームウェアおよびソフトウェアは、定期的に更新されます。アップデートはソフトウェアリリースとして公開されます。ソフトウェアリリースは、サーバーで使用できるすべてのファームウェア、ハードウェアドライバ、およびユーティリティを含む、ダウンロード(パッチ)のセットです。これらはすべてまとめてテストされています。ダウンロードに含まれている Read Me ドキュメントに、前回のソフトウェアリリースから変更された点と変更されていない点が説明されています。

サーバーのファームウェアとソフトウェアは、ソフトウェアリリースが入手可能になりしだい、更新してください。ソフトウェアリリースには、多くの場合はバグの修正が含まれていて、更新によってサーバーモジュールソフトウェアは、最新のシャーシファームウェアおよびその他のシャーシコンポーネントのファームウェアやソフトウェアとの互換性を確保できます。

ダウンロードパッケージ内の Read Me ファイルおよび『Sun Blade X3-2B (旧 Sun Blade X6270 M3) プロダクトノート』には、ダウンロードパッケージ内の更新済みのファイル、および現在のリリースで修正されているバグに関する情報が記載されています。さらに、プロダクトノートには、最新のシャシーのファームウェアでサポートされているサーバーモジュールソフトウェアのバージョンに関する情報も記載されています。

ファームウェアおよびソフトウェア入手のオプション

次のオプションのいずれかを使用して、サーバーの最新ファームウェアおよびソフトウェアセットを入手します:

- **Oracle System Assistant** – Oracle System Assistant は、出荷時にインストールされる Oracle サーバー用の新しいオプションであり、サーバーのファームウェアおよびソフトウェアを簡単にダウンロードおよびインストールできるように支援します。

Oracle System Assistant の使用方法の詳細は、『Sun Blade X3-2B (旧 Sun Blade X6270 M3) 管理ガイド』の「Oracle ILOM Web インタフェースからの Oracle System Assistant へのアクセス」を参照してください。

- **My Oracle Support** – システムのすべてのファームウェアとソフトウェアは、My Oracle Support (<http://support.oracle.com>) から入手できます。

My Oracle Support で入手できるものの詳細は、98 ページの「入手可能なソフトウェアリリースパッケージ」を参照してください。

My Oracle Support からソフトウェアリリースをダウンロードする方法は、100 ページの「My Oracle Support を使用してファームウェアとソフトウェアをダウンロードする」を参照してください。

- **物理メディアのリクエスト (PMR)** – My Oracle Support から入手できるダウンロード (パッチ) が含まれている DVD をリクエストできます。

詳細は、102 ページの「物理メディアのリクエスト (オンライン)」を参照してください。

入手可能なソフトウェアリリースパッケージ

My Oracle Support では、ダウンロードは製品ファミリ、製品、およびバージョン別にグループ分けされています。バージョンには1つ以上のダウンロード (パッチ) が含まれます。

サーバーとブレードの場合、パターンは似ています。製品種別はサーバーです。サーバーごとにリリースセットが含まれます。これらのリリースは本当のソフトウェア製品のリリースではなく、サーバー用のアップデートのリリースです。これらのアップデートはソフトウェアリリースと呼ばれ、まとめてテスト済みの複数

のダウンロードで構成されます。各ダウンロードには、ファームウェア、ドライバ、またはユーティリティが含まれます。

My Oracle Support には、次の表に示したとおりの、このサーバーファミリ向けのダウンロードタイプのセットが含まれます。これらは物理メディアのリクエスト (PMR) によってリクエストすることもできます。Oracle System Assistant を使用しても、同じファームウェアおよびソフトウェアをダウンロードできます。

パッケージ名	説明	このパッケージをダウンロードするタイミング
X3-2B SW <i>version</i> – Firmware Pack	Oracle ILOM、BIOS、およびオプションカードファームウェアを含む、すべてのシステムファームウェア。	最新のファームウェアが必要なとき。
X3-2B SW <i>version</i> – OS Pack	OS パックは、サポートされているオペレーティングシステムのバージョンごとに入手できます。各 OS パックには、該当のバージョンの OS 用のすべてのツール、ドライバ、およびユーティリティのパッケージが含まれていません。 ソフトウェアには、Oracle Hardware Management Pack および LSI MegaRAID ソフトウェアが含まれます。	OS 固有のドライバ、ツール、またはユーティリティをアップデートする必要があるとき。
X3-2B SW <i>version</i> – All packs	Firmware Pack、すべての OS Pack、およびすべてのドキュメントを含みます。 このパックに SunVTS または Oracle System Assistant のイメージは含まれません。	システムファームウェアと OS 固有ソフトウェアの組み合わせをアップデートする必要があるとき。
X3-2B SW <i>version</i> – Diagnostics	SunVTS 診断イメージ。	SunVTS 診断イメージが必要なとき。
X3-2B SW <i>version</i> – Oracle System Assistant Updater	Oracle System Assistant アップデータおよび ISO アップデートイメージ。	Oracle System Assistant を手動で復旧またはアップデートする必要があるとき。

各ダウンロードは zip ファイルで、Read Me と、ファームウェアまたはソフトウェアのファイルを含むサブディレクトリのセットが含まれています。Read Me ファイルに

は、前回のソフトウェアリリース以降に変更されたコンポーネントと、修正済みのバグの詳細が記載されています。これらのダウンロードのディレクトリ構造の詳細は、『Sun Blade X3-2B (旧 Sun Blade X6270 M3) 管理ガイド』を参照してください。

ファームウェアとソフトウェアの入手

このセクションでは、ソフトウェアリリースファイルをダウンロードまたはリクエストする方法について説明します。

注 - Oracle System Assistant を使用して、最新のソフトウェアリリースを簡単にダウンロードして使用することもできます。詳細は、『Sun Blade X3-2B (旧 Sun Blade X6270 M3) 管理ガイド』を参照してください。

アップデートされたファームウェアとソフトウェアには、ほかにも2つの入手方法があります。

- 100 ページの「My Oracle Support を使用してファームウェアとソフトウェアをダウンロードする」
- 101 ページの「物理メディアをリクエストする」

▼ My Oracle Support を使用してファームウェアとソフトウェアをダウンロードする

- 1 <http://support.oracle.com> にアクセスします
- 2 My Oracle Support にサインインします。
- 3 ページ上部にある「パッチと更新版」タブをクリックします。
「パッチと更新版」画面が表示されます。
- 4 「検索」画面で、「製品またはファミリー (拡張検索)」をクリックします。
画面に検索フィールドが表示されます。
- 5 「製品」フィールドで、ドロップダウンリストから製品を選択します。
あるいは、製品名 (たとえば、Sun Blade X3-2B) の全体または一部を、一致するものが表示されるまで入力します。

- 6 「リリース」フィールドで、ドロップダウンリストからソフトウェアリリースを選択します。
入手可能なすべてのソフトウェアリリースを表示するには、フォルダを展開します。
- 7 「検索」をクリックします。
ソフトウェアリリースは、ダウンロード(パッチ)のセットで構成されます。
入手可能なダウンロードの説明については、98 ページの「入手可能なソフトウェアリリースパッケージ」を参照してください。
- 8 パッチを選択するには、パッチ名の横にあるチェックボックスをクリックします(複数のパッチを選択できます)。
アクションパネルがポップアップ表示されます。このパネルには複数のアクションのオプションが表示されます。
- 9 アップデートをダウンロードするには、ポップアップパネルの「ダウンロード」をクリックします。
自動的にダウンロードが開始されます。

物理メディアをリクエストする

手続き上、Oracle Web サイトからダウンロードできない場合は、物理メディアのリクエスト (PMR) によって最新のソフトウェアリリースを入手できます。

次の表で、物理メディアのリクエストを行うための大まかなタスクについて説明し、詳細情報のリンクを示します。

説明	リンク
リクエストを行うために必要な情報を収集します。	101 ページの「物理メディアのリクエスト用の情報を収集する」
オンラインで、または Oracle サポートに電話することで、物理メディアをリクエストします。	102 ページの「物理メディアのリクエスト(オンライン)」 103 ページの「物理メディアのリクエスト(電話)」

物理メディアのリクエスト用の情報を収集する

物理メディアのリクエスト (PMR) を行うには、サーバーの保証またはサポート契約が必要です。

PMR を実行する前に、次の情報を収集します:

- 製品名、ソフトウェアリリースのバージョン、および必要なパッチを把握します。最新のソフトウェアリリースと、リクエストするダウンロードパッケージ(パッチ)の名前がわかっていると、より簡単にリクエストを行うことができます。
- *My Oracle Support* にアクセスできる場合 - 100 ページの「[My Oracle Support を使用してファームウェアとソフトウェアをダウンロードする](#)」の手順に従って、最新のソフトウェアリリースを確認し、入手可能なダウンロード(パッチ)を表示します。パッチのリストを表示したあとに、ダウンロード手順を続けない場合は、「パッチ検索結果」ページから移動できます。
- *My Oracle Support* にアクセスできない場合 - 98 ページの「[入手可能なソフトウェアリリースパッケージ](#)」にある情報を使って、目的のパッケージを判断してから、最新のソフトウェアリリース用のこれらのパッケージをリクエストしてください。
- 送付先情報を用意します。リクエストのためには、連絡先、電話番号、電子メールアドレス、会社名、および送付先住所を提供する必要があります。

▼ 物理メディアのリクエスト(オンライン)

始める前に リクエストを行う前に、[101 ページの「物理メディアのリクエスト用の情報を収集する」](#)に記載されている情報を収集します。

- 1 <http://support.oracle.com> にアクセスして、サインインします。
- 2 ページの右上隅にある「問合せ先」リンクをクリックします。
- 3 「リクエストの説明」セクションで、次を入力します:
 - a. 「リクエスト・カテゴリ」ドロップダウンリストから、次を選択します:
物理メディアのリクエスト(レガシー Oracle 製品、Primavera、BEA、Sun 製品)
 - b. 「リクエスト・サマリー」フィールドに、次を入力します:
Sun Blade Sun Blade X3-2B の最新ソフトウェアリリースの **PMR**
- 4 「リクエスト詳細」セクションで、次の表に示されている質問に回答します:

質問	回答
物理ソフトウェアメディアの送付リクエストですか?	はい
どの製品ラインに関するメディアのリクエストですか?	Sun 製品

質問	回答
パッチのダウンロードに必要なパスワードの確認ですか？	いいえ
CD/DVD でのパッチのリクエストですか？	はい
パッチを CD や DVD でリクエストする場合、パッチの番号、OS とプラットフォームをお知らせください。	該当するソフトウェアリリースのダウンロードごとに、パッチ番号を入力します。
リクエストする製品名とバージョンをお知らせください。	製品名: Sun Blade X3-2B バージョン: 最新のソフトウェアリリース番号。
リクエストするメディアの OS とプラットフォームをお知らせください。	OS 固有のダウンロードをリクエストする場合は、ここで OS を指定します。システムファームウェアのみをリクエストする場合は、「一般」と入力します。
この送付に言語は必要ですか？	いいえ

- 5 送付先の担当者、電話番号、電子メールアドレス、会社名、および送付先住所の情報を入力します。
- 6 「次へ」をクリックします。
- 7 「関連ファイル」の下に **Knowledge Article 1361144.1** と入力します
- 8 「送信」をクリックします。

▼ 物理メディアのリクエスト (電話)

始める前に リクエストを行う前に、101 ページの「物理メディアのリクエスト用の情報を収集する」に記載されている情報を収集します。

- 1 **Oracle Global Customer Support Contacts Directory** にある適切な番号を使用して、**Oracle** サポートに電話します:
<http://www.oracle.com/us/support/contact-068555.html>
- 2 **Sun Blade X3-2B** の物理メディアのリクエスト (PMR) を行いたい旨を **Oracle** サポートに伝えます。
 - **My Oracle Support** から特定のソフトウェアリリースおよびパッチ番号の情報にアクセスできる場合は、この情報をサポート担当者に伝えます。

- ソフトウェアリリース情報にアクセスできない場合は、**Sun Blade X3-2B**の最新のソフトウェアリリースをリクエストしてください。

アップデートのインストール

以降のトピックでは、ファームウェアとソフトウェアのアップデートのインストールに関する情報を提供します:

- [104 ページの「ファームウェアをインストールする」](#)
- [105 ページの「ハードウェアドライバと OS ツールのインストール」](#)

ファームウェアをインストールする

更新されたファームウェアは、次のいずれかを使用してインストールできます:

- **Oracle Enterprise Manager Ops Center** – Ops Center Enterprise Controller では、Oracle から自動的に最新のファームウェアをダウンロードするか、Enterprise Controller 内にファームウェアを手動でロードできます。どちらの場合も、Ops Center が 1 つ以上のサーバー、ブレード、またはブレードシャーシ上にファームウェアをインストールできます。

詳細については、次にアクセスしてください:

<http://www.oracle.com/us/products/enterprise-manager/opscenter/index.html>

- **Oracle System Assistant** – Oracle System Assistant では、Oracle の最新のファームウェアをダウンロードしてインストールできます。

詳細は、『[Sun Blade X3-2B \(旧 Sun Blade X6270 M3\) 管理ガイド](#)』の「サーバー構成のための [Oracle System Assistant の使用](#)」を参照してください。

- **Oracle Hardware Management Pack** – Oracle Hardware Management Pack 内の fwupdate CLI ツールを使用して、システム内のファームウェアを更新できます。

詳細については、次にアクセスしてください:<http://www.oracle.com/pls/topic/lookup?ctx=ohmp>。

- **Oracle ILOM** – Oracle ILOM および BIOS ファームウェアは、Oracle ILOM Web インタフェースおよび Oracle ILOM CLI を使用して更新できる唯一のファームウェアです。

詳細については、次にアクセスしてください:<http://www.oracle.com/pls/topic/lookup?ctx=ilom31>。

ハードウェアドライバと OS ツールのインストール

更新されたハードウェアドライバとオペレーティングシステム (OS) 関連のツール (Oracle Hardware Management Pack など) は、次のいずれかを使用してインストールできます:

- **Oracle Enterprise Manager Ops Center** - 詳細については、次にアクセスしてください:

<http://www.oracle.com/us/products/enterprise-manager/opscenter/index.html>

- **Oracle System Assistant** - 詳細は、『Sun Blade X3-2B (旧 Sun Blade X6270 M3) 管理ガイド』の「Oracle System Assistant によるサーバーの設定」を参照してください。
- JumpStart、Kickstart、またはサードパーティー製ツールなどのその他の配備メカニズム。

詳細は、使用している OS のドキュメントを参照してください。

索引

C

- CLI, Ethernet を使用した Oracle ILOM へのアクセス, 45-46
- CMM
 - NET MGT ポートへのケーブル接続, 29-30
 - Oracle ILOM, 33
- CPU, 「プロセッサ」を参照

D

- DIMM, サポートされている, 11

I

- ILOM, 「Oracle ILOM」を参照
- IP アドレス
 - Oracle ILOM CLI を使用してアクセス, 41-43
 - Oracle ILOM Web インタフェースを使用して取得, 38-41

L

- LED, 14
 - フロントパネル, 14
- LED の特定, 14
- Locate ボタン, 14
- LSI BIOS 構成ユーティリティ, 67-70

O

- Oracle ILOM
 - CLI を使用したホストコンソールへのアクセス, 48
 - CLI を使用して IP アドレスにアクセス, 41-43
 - Oracle ILOM CMM, 33
 - Oracle ILOM SP, 35
 - Oracle System Assistant の起動, 54-55
 - Web インタフェースを使用したホストコンソールへのアクセス, 48-51
 - Web インタフェースを使用したログイン, 43-45
 - Web インタフェースを使用して IP アドレスにアクセス, 38-41
 - アクセス方法, 43
 - イベントログ, 93
 - 概要, 31
 - コマンド行インタフェース (CLI) を使用したログイン, 45-46
 - シリアル接続を使用したログイン, 46-47
 - 接続オプション, 32
 - 設定タスク, 31-51
 - ホストコンソールリダイレクション, 47
- Oracle Solaris OS
 - インストール済みの構成, 71-77
 - ドキュメント, 71
- Oracle System Assistant
 - Oracle ILOM を使用して起動, 54-55
 - アクセス, 53
 - ソフトウェアとファームウェアの設定, 57-58
 - ローカルで起動, 55-56

Oracle VM
更新, 83
構成, 79-85
構成ワークシート, 79
入門, 84
Oracle リモートコンソール, Oracle ILOM 経由のアクセス, 47

S

SP, 説明, 35

U

UEFI BIOS, 「BIOS」を参照
Unified Extensible Firmware Interface (UEFI), 「BIOS」を参照
USB フラッシュドライブ, 仕様, 17

V

VGA モニター, 接続, 27-28

W

Web インタフェース, Ethernet を使用した Oracle ILOM へのアクセス, 43-45
Web ブラウザ, Oracle ILOM を使用, 43-45

あ

アクセス
Oracle ILOM, 43
シリアルホストコンソール, 47

い

インジケータ, LED, 14

インストール
サーバーモジュール
準備, 22
インストール済み OS オプション
Oracle Solaris OS, 71-77
Oracle VM, 79-85

お

オプションコンポーネント, 21
オペレーティングシステム
インストール済みイメージの構成, 71-77, 79-85
サポートされている, 11
設定, 58
温度仕様, 16

か

仮想ディスク, 「ボリューム」を参照
環境仕様, 16

き

キーボード, 接続, 28
機能, 11

け

ケーブルの設置
CMM NET MGT ポート, 29-30
ドングルケーブル, 26-27

こ

構成
Oracle Solaris OS, 72
Oracle VM, 79-85
高度仕様, 16
コマンド行インタフェース (CLI), 「CLI」を参照

コンソール,シリアルホスト接続, 47
コンポーネント,オプション, 21

さ

サーバーの障害,特定, 92
サーバーのリセット
 Oracle ILOM CLI を使用, 91-92
 Oracle ILOM Web インタフェースを使用, 92
サーバーモジュール,取り付け, 23-24
サーバーモジュールの概要, 11-17
サービス,情報ワークシート, 94
サービスプロセッサ,「SP」を参照
サポート,情報ワークシート, 94
サポートされているコンポーネント
 DIMM, 11
 NEM, 11
 シャーシ, 11
 メモリー, 11

し

湿度仕様, 16
シャーシ,サポート, 11
シャーシミッドプレーンサポート, 11
出荷キットの内容, 19

準備

ハードドライブ
 LSI BIOS 構成ユーティリティー, 67-70
 Oracle System Assistant, 65-67

仕様

USB フラッシュドライブ, 17
温度, 16
環境, 16
高度, 16
湿度, 16
寸法, 16
電圧, 16
電氣的, 16
電源, 16
シリアル接続,Oracle ILOM での使用, 46-47
シリアルデバイス,接続, 29
シリアル番号,場所, 94

す

ストレージオプション, 13
寸法仕様, 16

せ

静電放電 (ESD), 予防策, 20
製品の機能と仕様, 11

接続

VGA モニター, 27-28
キーボード, 28
シリアルデバイス, 29
ドングルケーブル, 26-27
マウス, 28

設置

サーバーモジュール
 タスク概要, 9

そ

ソフトウェア, Oracle System Assistant による設定, 57-58

て

電圧仕様, 16
電氣的仕様, 16
電源仕様, 16
電源状態,トラブルシューティング, 93
電源の切断

正常

Oracle ILOM CLI を使用, 88
Oracle ILOM Web インタフェースを使用, 88-89
電源ボタンを使用, 88

即時

Oracle ILOM CLI を使用, 90
Oracle ILOM Web インタフェースを使用, 90-91
電源ボタンを使用, 89-90

と

- ドキュメント, Oracle Solaris OS, 71
- ドライバ, インストール, 58
- トラブルシューティング
 - インストールに関する問題, 87-96
 - 電源状態, 93
- 取り付け
 - サーバーモジュール
 - 手順, 23-24
- ドングルケーブル
 - 接続, 26-27
 - ポート, 14

は

- ハードドライブ
 - 準備
 - LSI BIOS 構成ユーティリティ, 67-70
 - Oracle System Assistant, 65-67
- 背面パネル, 15

ふ

- ファームウェア, Oracle System Assistant による設定, 57-58
- プロセッサ, サポートされている, 11
- フロントパネル, LED, 14

ほ

- ホストシリアルコンソール, Oracle ILOM 経由の接続, 47
- ホストバスアダプタ (HBA), サポートされている, 61
- ボリューム
 - 作成, 67-70
 - LSI BIOS 構成ユーティリティ, 67-70
 - Oracle System Assistant, 65-67

ま

- マウス, 接続, 28
- マルチポートケーブル, 「ドングルケーブル」を参照

め

- メモリー, 「DIMM」を参照

も

- モニター, 接続, 27-28

ゆ

- ユニバーサルコネクタポート (UCP), 場所, 14

り

- リモートコンソール, 「Oracle リモートコンソール」を参照